

中小規模河川古川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

## 小僧遺跡

2018.3

香川県教育委員会

# 序 文

本書には、中小規模河川古川改修事業に伴い発掘調査を行った香川県東かがわ市川東に所在する小僧遺跡（こぞういせき）の報告を収録しています。

小僧遺跡では、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物が出土し、遺跡における土地利用の変遷について、貴重な資料を得ることができました。また、自然河川から状態の良好な弥生時代後期や古墳時代前期後葉から中期前葉の遺物が出土し、古墳築造前の集落等が近接して所在した可能性が想定されます。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県長尾土木事務所及び関係諸機関、地元関係者各位に多大なご協力とご指導をいただきましたことに、深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

# 例　　言

- 1 本報告書は、中小規模河川古川改修事業に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市川東に所在する小僧遺跡（こぞういせき）の報告を収録している。
- 2 発掘調査は香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時）が調査担当として実施した。
- 3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間 平成12年1月1日～平成12年3月31日  
担当 主任文化財専門員 蓬本和博 技師 信里芳紀
- 4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。

香川県土木部横断自動車道対策室（当時）、香川県長尾土木事務所、東かがわ市教育委員会、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は藏本晋司が担当した。
- 6 本報告書で用いる座標系は世界測地系（国土地標第IV系）で、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。

SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SR 自然河川 SX 性格不明遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位：m）である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の固化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面をA面、右側の面をB面として記述する。剥片石器の場合はA面が背面、B面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

弥生土器：森下英治1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29冊 龍川五条遺跡Ⅱ、飯野東分山崎南遺跡』、香川県教育委員会・財香

- 川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団  
信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」  
『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集「弥生時代前中期～中期初頭の動態」、古代学  
協会四国支部  
信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」  
『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』、香川県埋蔵文化財センター  
信里芳紀 2011 「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院  
統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・独立行  
政法人国立病院機構善通寺病院  
信里芳紀 2014 「讃岐地域における古墳時代前期の土器編年」『古式土師器の編年の研究－四国  
島の古墳時代前期の土器様相－』、四国考古学研究会  
須恵器： 田辯昭三 1981 『須恵器大成』、角川書店  
大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 『年代のものさし－大阪府立近つ飛鳥博物館図録40－』  
佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記  
念 考古学論叢』、関西大学文学部考古学研究室  
中世： 佐藤竜馬 1995 「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18  
冊 国分寺楠井遺跡』、香川県教育委員会・御香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団  
佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文  
化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』、香川県教育委員会・御香川県埋蔵文化財調査セン  
ター

# 本文目次

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	2

## 第2章 立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

## 第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	8
第2節 調査の目的	8
第3節 基本層序	9
第4節 遺構・遺物	16

## 第4章 自然科学的分析の成果

第1節 樹種同定	40
第2節 放射性炭素年代測定	45

## 第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷	48
-----------	----

# 挿図目次

第1図	道路位置図	1	第18図	I 区 SR02 出土遺物実測図	26
第2図	道路位置図	3	第19図	I 区 SR02 出土遺物実測図	27
第3図	周辺道路分布図	5	第20図	II 区 SR02 出土遺物実測図	28
第4図	調査区割図	8	第21図	I 区柱穴出土遺物実測図	29
第5図	I 区西壁土層断面図	10	第22図	SK01・SK11・SK14 平・断面図	29
第6図	I 区西壁土層断面図	11	第23図	I 区動溝群平・断面図	30
第7図	I・①区北壁土層断面図	12	第24図	I 区動溝群出土遺物実測図	31
第8図	II・①区北壁土層断面図	13	第25図	SX01 平・断面・出土遺物実測図	32
第9図	II・②区北壁土層断面図	14	第26図	II 区 SK02～SK07 平・断面・出土遺物実測図	34
第10図	II・②区北壁土層断面図	15	第27図	II 区 SK08～SK10・SK12・SK13 平・断面図	35
第11図	遺構配置図	17	第28図	SR01 平・断面・出土遺物実測図	36
第12図	I 区 SR02 土層断面図	19	第29図	SR01 出土遺物実測図	37
第13図	II 区 SR02 土層断面図	20	第30図	SR01 出土遺物実測図	38
第14図	II 区 SR02 土層断面図	21	第31図	包含層等出土遺物実測図	39
第15図	II 区 SR02 土層断面図	22	第32図	暦年較正結果	46
第16図	I 区 SR02 出土遺物実測図	23	第33図	遺構変遷図	49
第17図	I 区 SR02 出土遺物実測図	25			

# 表目次

第1表	土坑属性一覧	33	第9表	土器觀察表(4)	54
第2表	出土木製品の樹種同定結果	40	第10表	土器觀察表(5)	55
第3表	出土木製品の樹種同定結果一覧	42	第11表	土製品觀察表	55
第4表	測定試料および処理	45	第12表	瓦觀察表	55
第5表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	46	第13表	石器觀察表	56
第6表	土器觀察表(1)	51	第14表	木製品觀察表	56
第7表	土器觀察表(2)	52	第15表	金属器觀察表	56
第8表	土器觀察表(3)	53			

# 写真目次

図版1	出土木材の光学顕微鏡写真(1)	43	II・①区 SR02 下層流路B土層断面(南より)	
図版2	出土木材の光学顕微鏡写真(2)	44	図版9 遺構写真7	64
図版3	出土木材の光学顕微鏡写真(3)	58	II・①区 SR02 下層流路B遺物出土状況(南より)	
	遺跡遠景(南より)		II・②区 SR02 下層流路全景(北より)	
	遺跡遠景(南より)		II・②区 SR02 下層流路全景(西より)	
図版4	遺構写真2	59	図版10 遺構写真8	65
	I・②区全景(東より)		II・②区 SR02 下層流路A全景(北より)	
	I・①区全景(東より)		II・②区 SR02 下層流路全景(北より)	
	I・①区 SR02 東壁土層断面(西より)		II区よりI区遠望(南より)	
図版5	遺構写真3	60	図版11 遺物写真1(土器)	66
	I・①区 SR02 檢出状況(北より)		2・3・4・6・9・13・34・44・68・80・82・ 83・84・85・88・91・93・103・159	
	I・①区 SR02 東半部全景(東より)		図版12 遺物写真2(土器)	67
	I・①区 SR02 西半部全景(西より)		15・16・17・18・27・29・31・32・33・37・40・ 47・61・126・134	
図版6	遺構写真4	61	図版13 遺物写真3(石器)	68
	I・①区 SR02 北半下層遺物出土状況(西より)		69・70・71・72・73・74・75・100・101・102・ 143・144・149・150・151・160・161・162・ 163・164・180・181	
	I・②区全景(北より)		図版14 遺物写真4(石器・金属器)	69
	I・①区全景(東より)		76・152・153・165	
図版7	遺構写真5	62	図版15 遺物写真5(木製品)	70
	II・②区全景(北より)		77・78・79・166・167	
	II・①区全景(西より)			
	II・②区全景(北より)			
図版8	遺構写真6	63		
	II・①区北壁土層断面(南北より)			
	II・①区 SR02 下層流路A土層断面(南より)			

# 付図目次

付図 小僧遺跡平面図

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

古川は、讃岐山脈に源を有し、北流して秋葉山等の周辺丘陵の落水を拾い、瀬戸内海に注ぐ二級河川である。古川の改修事業は、香川県長尾土木事務所が主体となり、下流域より随時工事が実施されてきたが、古川の上流、山麓部より与田川が形成した沖積扇状地への出口付近に、四国横断自動車道（津田～引田間）とインターチェンジの建設が予定され、これを機にインターチェンジ部分とそこから北側へ延長600mほどの河川改修事業が新たに計画された。平成10年度に本事業に伴う用地買収が進展したことを受け、香川県教育委員会では事業予定地内の分布調査を実施した。その結果、対象地の北半分には条里型地割が良好に残存することが判明した。事業面積が広大であること、工事の内容が現河川の拡



第1図 遺跡位置図1

幅や一部バイパス河川の開削を伴うものであることから、香川県長尾土木事務所と協議を実施し、埋蔵文化財の保存協議に必要な資料を得るため、事業実施前に試掘調査を行うことで合意した。

平成10年10月6日・7日に試掘調査を実施した結果、弥生時代や中・近世の遺構・遺物が確認され、「小僧遺跡」として文化財保護法に基づく事前の保護処置が必要と判断された。この結果を受けて、再度香川県長尾土木事務所と協議を実施し、平成12年1月～3月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時）に委託して発掘調査を実施することとなった。なお、試掘調査の詳細については、報告書（香川県教育委員会1999「埋蔵文化財試掘調査報告書」香川県内遺跡発掘調査）を参照されたい。

## 第2節 発掘調査と整理作業の経過

発掘調査は香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として、平成11年4月1日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を両者の間で締結して実施した。発掘調査は直営方式により実施し、発掘調査期間は平成12年1月1日～同年3月31日、発掘調査面積は1,611m<sup>2</sup>であった。

整理作業は、平成29年5月1日から同年6月30日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と、遺構図の淨書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28%入りコンテナ24箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。なお、遺物の実測・淨書の一部については株式会社イビソクに委託した。

発掘調査及び整理作業の体制は下表のとおりである。

平成 11 年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局	文化財課	財団法人香川県障害文化財調査センター
組織	課長 課長補佐	小原 駿己 小原 博史
業務	係長 係長 係長 主査	中村 祐伸 三宅 陽子 松村 弘史 田中 幸男
障害文化財	副主査 係長 文化財専門員 主任技師	横瀬 常徳 西村 審文 森 热也 鷲澤 淩司
		副会長 次長 副主査兼係長 副主査兼係長 係長 会長 会長 主任事務 事務 主任文化財専門員 主任文化財専門員 文化財専門員 技師
		吉田 亮氏 川原 昭幸 六草 正應 田中 秀文 新 一郎 長尾 寿江子 山本 和代 細川 信哉 長尾 進治 大山 真光 木本 博博 西岡 連哉 星野 芳紀 東条 黄美

### 平成29年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課		香川県生涯文化財センター			
総括	課長	小野 和代	総括	所長	増田 実
副課長	片桐 季浩		次長	森 篤也	
秘書・生涯学習振興グループ			課長	森 篤也（兼務）	
副主幹	板下 由美子		副主幹	市原 政好	
主事	和木 順佳		主任	高橋 行範	
文化財グループ			主任	丸尾 麻知子	
課長補佐	片桐 季浩（兼務）		主任	岩崎 昂平	
主任文化財専門員	似里 芳紀		主任	柳井 隆史	
主任文化財専門員	佐藤 真也	資料普及課	課長	古吉 伸久	
			主任文化財専門員	竜木 英司	
			嘱託	大山 相子	
				加藤 忠子	
				小林 奈央子	
				佐々木博子	
				山本 香川美	

## 第2章 立地と環境

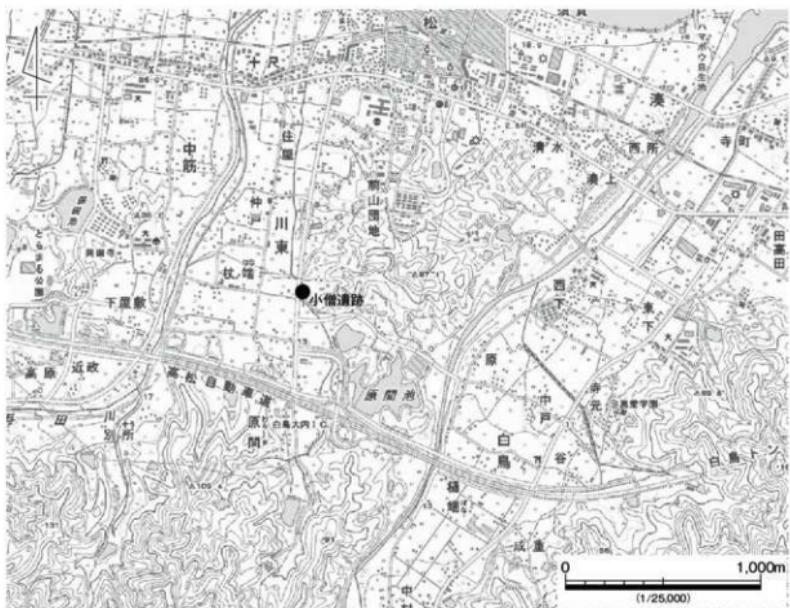
### 第1節 地理的環境

遺跡は、東かがわ市川東に所在する。調査前の地目は、耕作地として利用されていた。

四国は、本州・北海道・九州とともに日本列島を構成する主要4島の一つで、面積約18,300km<sup>2</sup>と4島の中では最小である。南部は太平洋に、東～北部は紀伊水道や瀬戸内海を介して本州に、西部は農後水道を介して九州に、それぞれ面する。地形面では、四国の北半部を東西に走行する中央構造線により、それ以北の西南日本内帯と、以南の西南日本外帯に区分される。外帯には、最高標高1,982mの四国山地が構造線に沿って東西に聳え、以南の太平洋側は温暖で多雨なのに対して、以北の瀬戸内側は温暖で少雨と気候が相違する。この気候に対応して、瀬戸内側では弥生時代より土器製塙が盛んに行われてきた。

香川県は四国の北東部に位置し、南縁には最大標高約1,060mの等高性に優れた讃岐山脈が東西に走行し、徳島県との県境となる。

遺跡が所在する東かがわ市大内・白鳥地域は、北は瀬戸内海に面し、東～南～西は与治山や虎丸山、北山等の標高約200～400mの山塊に囲繞された、面積約9.7km<sup>2</sup>の閉鎖的な臨海性の小平野を中心とする。平野部東半は中川と湊川が、西半は与田川と番屋川、古川がそれぞれ北流し、流域に扇状地性の谷底平



第2図 遺跡位置図2(国土地理院発行1/25,000地形図「三本松」に一部加筆して掲載)

野や氾濫平野を形成する。河口域には、現海岸線に平行して数列の砂州・砂堆が形成され、その背後には海岸平野・三角州が広がる。現在三角州は、その多くが盛土され市街地へと変貌している。

平野部に接する山塊は、後期白亜紀の珪長質深成岩類（領家帯）によって形成され、その奥部の讃岐山脈には、後期白亜紀の海成礁岩や泥岩、砂岩等が分布する和泉層群が東西走する。与田・番屋川は領家帯に水源があり、流域は花崗岩質の堆積層を形成し、湊川の水源は和泉層群に達し、河床には砂岩等の堆積岩が花崗岩類に混じって多く認められる。弥生時代以降、和泉層群の砂岩の転石は、敲石や砥石として多く利用されたようだ。

遺跡は、与田川・古川等の嘗力によって形成された、平均勾配約4.4%の扇状地性平野の南東隅部に位置する。扇状地上面は最大比高1m前後の波状の起伏を呈しており、凹地部分は扇状地の旧中州間の網状流跡・旧低水路と考えられる。扇状地中央部に位置する仲戸遺跡の発掘調査では、縄文時代後期や弥生時代終末期前後に埋没した自然河川（旧低水路）を検出（香川県教育委員会2016）しており、扇状地の形成は縄文時代後期以前に遡ることが明らかとなっている。

また、与田川の東西両岸には、比高0.5m前後の小崖が幅100～150mの幅で連続しているのが確認できる。この崖面は、瀬戸内海東部の臨海平野で指摘された完新世段丘（高橋1990）に相当し、その形成時期は古代末頃と想定されている。上述した段丘上面に展開する旧低水路等の埋没下限が、弥生時代終末期前後とする時期と矛盾しない。

本地域は、上述したように自然地形により画された閉鎖的な空間を形成するが、東は中川上流の帰来山と翼山の間の小峠を介して引田地域と、南は湊川上流の鶴の田尾峠（標高約370m）を介して徳島県吉野川下流域と、西は番屋川上流の北山南麓の小峠を介して津田湾沿岸地域や、田面峠（標高約50m）を介して長尾盆地と、陸路によりそれぞれ連絡することが可能で、さらに各河川を利用した内陸部との舟運や、湊川あるいは与田川河口部に想定される『兵庫北関入船納帳』（林屋編1981）に記された「三本松」など臨海部の港津を介して、海上交通により遠隔地ともアクセス可能な、交通の結節点としての恵まれた条件が付与された地域と評価できる。

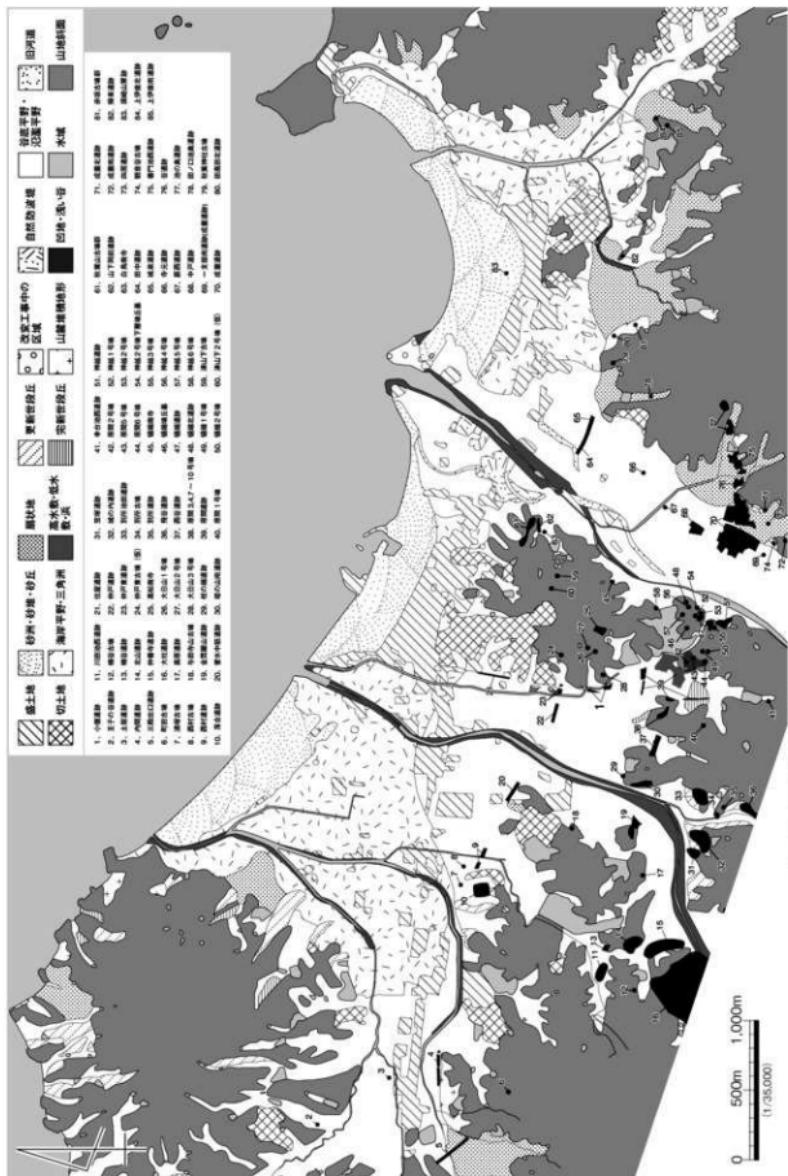
## 第2節 歴史的環境

### 縄文から古墳時代の動向

上述した陸路や海路の利用は、原間遺跡の自然河川より、結晶片岩粒の混入した縄文時代中期と晚期前半の土器が出土（香川県教育委員会2005）し、田中遺跡からは結晶片岩製の石棒が出土（香川県教育委員会2017）しており、遙くとも縄文時代に遡る可能性があることが考古資料から実証される。

さて、本地域の遺跡は、第3図に示したように、現状では谷底平野や氾濫平野、扇状地上に集落関係の遺跡が、丘陵上に古墳や墳墓等の遺跡がそれぞれ分布する。推定南海道も、海岸平野や三角州が内陸部にまで入り込む番屋川流域の松崎地区周辺を除けば、概ね氾濫平野上を中心、本地域を横断すると考えられている（金田1988）。今後の詳細な分布調査や試掘調査を待つ必要があろうが、海岸平野や三角州地域の開発は、中世後半期以降に遡れる可能性が高いと考えられる。

一方、氾濫平野の本格的な開発行為は、おそらく弥生時代に遡る。本地域での遺跡分布は、弥生時代中期中葉を除けば、後期中葉までは散漫であることが指摘されている。後期後半から終末期にかけて、鍛冶関連遺物を伴う竪穴建物等が検出された原間遺跡をはじめ、地域内で遺構や遺物が出土した遺跡数



は、中期後葉と比較して倍増する（信里 2004）。飛躍的に地域内の開発が進展したことは間違いない。

そうした動向と併行して、大型建物への金属器や玉類等の非自給物資の集中や、水銀朱を使用した葬送儀礼が行われた桶端埴丘墓の築造等、地域内での階層差が顕在化する。中期中葉の池の奥遺跡における磨製石斧類の集中保有は、集落間での分業体制の成立とともに、上記した階層化社会を準備したとも考えられる。

仲戸遺跡、仲戸東遺跡で実施した花粉分析の成果（香川県教育委員会 2016）からは、縄文時代晚期から弥生時代終末期の間ににおいてアカマツ林の相対的拡大が示され、その傾向は古代へと継続することが示された。これは遺跡周辺の丘陵部に自生していた照葉樹林等が林産資源の利用拡大により伐採され、二次林であるアカマツ林へと転換したこと、つまりは周辺の植生に大きなダメージを与えるような大規模かつ恒常的な開発行為がなされたことが想定され、上記した考古学的な状況を補完する。

こうした諸開発行為の延長上に、全長約 38 m の前方後円墳である大日山古墳の成立を位置付けることができよう。その後、中期には近年削抜式石棺が調査された秋葉山古墳群中の岡前地神社古墳や、韓半島との関係が想定される原間 6 号墳、後期には多彩な形象埴輪が出土した仲戸東遺跡等、時期により多様な様相を示しながら古墳が築造され、そこには吉備や畿内といった他地域との関係も垣間見ることができる。

## 古代の大内郡

律令期には、大内郡が置かれ、管内には引田・白鳥・入野・与泰の四郷があった。遺跡周辺は与泰郷に含まれる。大内郡はもと小郡であったが、「統日本後紀」承和十年（843）5月8日条に「又讚岐國大内郡小郡。只有領帳。領則領調入京。帳猶留國釐務。非常移病。无一人從公。加郷戸田数。既堪下郡改爲下。加領一員焉。」（黒板 1971）とあり、郷戸田数の増加などを理由に下郡に改め、領一員を加えている。

なお、天平十九年（747）2月11日の『法隆寺伽藍縁起井流記資財帳』（正倉院文書）の寺領莊園について記した部分に、「大内郡一處」とあり、郡内に法隆寺領の莊園があったとされるが、具体的な場所やその後の変遷については明らかではない。

白鳥に所在する白鳥廃寺は白鳳期創建の可能性が説かれ、過去の調査により塔や金堂とみられる基壇や心礎石が、近年の調査では僧坊とみられる掘立柱建物がそれぞれ検出され、一町四方の寺域に南滋賀廃寺式の伽藍配置が想定されている。また秋葉山南麓には、平安時代に高松廃寺が創建されている。小規模な寺院であったようだが、付属する瓦窯 2 基が調査されている。古代においては、秋葉山周辺が本地域の宗教センターとして機能していたと考えられる。

一方式内社は、水主の水主神社があり、承和三年（836）に從五位下に除された（『統日本後紀』）のを史料上の初見として、天慶三年（940）には藤原純友の乱平定祈願の功により正五位下を受けられている（『長寛勅文』）。また、平安末期に書写されたとされる大般若経を収める経函が至徳三年（1386）に作られ、その裏書に天承元年（1131）や長承二年（1133）等の国司や目代の神押とともに、社領の寄進がなされたことが記される。郡内唯一の式内社であり、讃岐国内でも有力社として評価されている（野中 1982）。

これら宗教施設は、自然地形により集落が展開する平野部とはやや隔離された場所に造営され、例えば白鳥廃寺が古代南海道の湊川渡河点至近地に位置しているように、水陸交通路の結節点に位置し、人・

モノ・情報のネットワークにアクセス可能な場所が巧みに選定されているように思われる。当時の宗教施設が有する機能の一端を示すものであろう。

### 中世への展開

鎌倉時代には大内郡は一円所領化され、皇室の御願寺領として京都淨金剛院領大内莊が成立し、天皇家に伝領された。与田郷の地頭に小早川氏がみえ、「小早川本仏譲状案」(小早川家文書)によれば、小早川氏が有した所職は地頭職以外に、公文・案主・田所等の諸職に及ぶ。嘉応二年（1170）に讃岐国は建春門院の院分国となり、国司としてその弟平親宗が任じられると、讃岐国は平家とのつながりを深める。その際国衙領であった大内郡は、平家の所領に編入され、鎌倉時代に平家没官領として、皇室所領大内莊が成立した可能性も考えられる。

本地域の中世の遺構・遺物は、本遺跡以外には、王子の谷、三殿出口、内間、西村、譽水中筋、仲戸、原間、成重、田中、城泉の各遺跡で確認されている。遺跡により時期差を認めるものの、平野部の開発が広域的になされていったことを物語る。

さて、本遺跡と与田川を挟んで対岸、直線距離にして約850m北西には、四国八十八箇所奥院として参詣者で賑わう、与田寺が所在する。与田寺は、医王山虚空藏院と号し、真言宗善通寺派に属し、本尊は薬師如来である。寺の『与田寺旧記』には、天平十一年（739）行基により創建され、当初の寺域は八町四方あり、医王山薬師寺と号し法相宗であったが、空海により、真言宗に改め、鎮護国家の勅願所としたという。寺の創建については、同時代の史料を欠くため実証は困難であり、発掘調査など考古学的な研究に依らなければならぬ。史料上の初見は、東かがわ市与田山にある若王寺所蔵の応永六年（1399）から同九年（1402）に書写された『若一王子大般若経』の奥書きに「虚空藏院住持金資 生年三十七」という増畔の署名があり、遅くとも15世紀初頭には増畔により再興されていたことは間違いない。本尊の薬師如来は12世紀の作とされ、13世紀の絹本着色仏涅槃図や、同時期の絹本着色稚児大師像、李朝初期（15世紀初頭）の可能性のある絹本着色地蔵曼荼羅図、応永十四年（1407）に増畔が願主となり聖宥が彫版した十二天像版本などが伝わる。また、寺の背後の山裾に2基の宝瓶印塔があり、鎌倉末期から南北朝期のものとされる。これら宝物の伝来については明らかではないが、12～13世紀頃には何らかの堂宇が建てられていた可能性が考えられよう。

### 引用・参考文献

- 香川県教育委員会 2001『原間遺跡 古川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- 香川県教育委員会 2005『県道大内白鳥イーター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原間遺跡』
- 香川県教育委員会 2016『国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 仲戸遺跡・仲戸東遺跡』
- 香川県教育委員会 2017『国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 田中遺跡』
- 金田草裕 1988『讃岐の条里遺跡』『香川県史』第一巻史編、香川県
- 黒板勝美編著 1971『新訂増補国史大系〔晋及魏〕統日本後紀』吉川弘文館
- 高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』
- 高橋学 1990『地形環境分析からみた条里遺構年代決定の問題点』『条里制研究』第6号、条里制研究会
- 野中寛文 1982『大水主社領の範囲と構造』『香川の歴史』2号
- 信里芳紀 2004『東讃地域の弥生集落の動態』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第47冊 成重遺跡I』、香川県教育委員会
- 萩野憲司 2004『讃岐国水主神社所蔵『外陣大般若経』と『北野社一切経』について』『佛教大学総合研究所紀要』別冊2
- 林屋辰三郎編 1981『兵庫北開入納帆帳』、中央公論

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 調査の方法

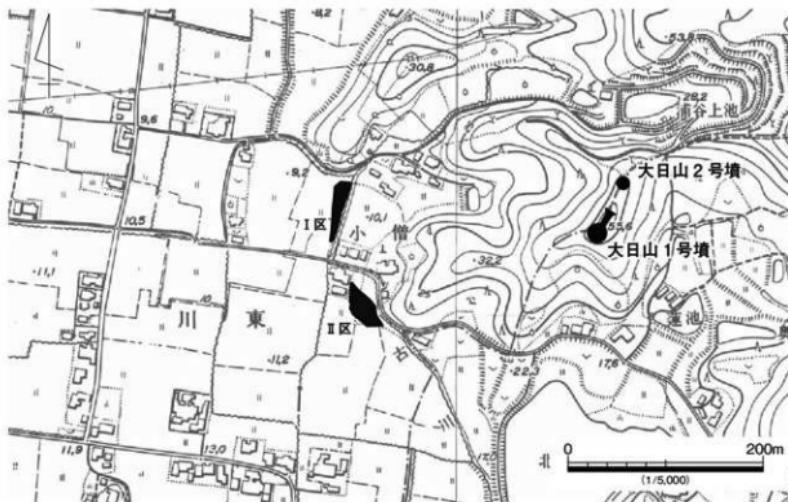
調査対象地は、河川改修予定地で、東西幅19～22m、南北延長44～60mの南北に細長い調査区であった。また、試掘調査の結果により、調査地は南北の2調査区に分かれ、第4図に示すように北側の調査区をI区、南側の調査区をII区とし、掘削土の処理等により、各々の調査区を南北に二分して、計4調査区に区分して調査を実施した。各調査区の北半調査区を①区、南半調査区を②区として、以下I-①区、I-②区等と記述する。調査前の地目は、いずれも水田などの耕作地であった。

調査は、直営方式により実施し、後述するI区第3遺構面、II区第2遺構面検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力により掘り下げ調査を行った。測量に要する基準杭は、業者に委託して設置し、平面図も業者に委託して航空測量により図化した。それ以外の土層断面図や遺物出土状況図等の作図や、遺構や遺物出土状況等の写真撮影は、調査員が行った。

各調査区は狭小なため、グリッドは設定せず、包含層等出土の遺物は調査区単位で取り上げた。遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、すべて北より新たな番号を付して統一した。遺構の種別については、調査時の担当者の所見を尊重しつつ、遺構の性格を考慮して一部変更した。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲した。

#### 第2節 調査の目的

本遺跡の調査では、既述したように試掘調査の結果、弥生時代から中世の遺構・遺物が出土しており、



第4図 調査区割図 (国土地理院発行国土基本図「N-FF49」を一部改変して掲載)

近接して本地域唯一の前期前方後円墳である大日山古墳（1号墳）が所在することから、古墳との関連を示す集落等が所在する可能性を想定し調査を実施した。

調査の結果は、後述するように大日山古墳との関連を示す遺構・遺物の出土に恵まれなかった。しかし、自然河川から状態の良好な弥生時代後期や古墳時代前期後葉～中期前葉の遺物が出土し、古墳築造前後の集落等が近接して所在する可能性が示唆されたことは、今後の周辺地域での調査に期待を抱かせるものである。また、中世から近世にかけての耕作痕跡が確認され、遺跡周辺における土地利用の変遷について資料が得られたことも、成果としてあげられよう。

### 第3節 基本層序

土層序の観察は、各調査区の南北方向と東西方向の調査区壁面にて行った。調査区は、上述したように耕地として利用されており、一部に工事に伴う造成土がそれら耕作土上面に堆積していた。造成土を除いた現地表面の標高は、I区で10.3m前後、II区で11.2m前後をそれぞれ測り、調査区は北に緩やかに降る緩斜面上に位置する。以下、各調査区ごとに基本層序について報告する。

I区では、近・現代の耕作土や旧耕作土等（第5・6図1～5層、第7図1～4層）下で、第1遺構面となる自然河川SR01及びその西側の旧耕作土層群（第5・6図6～21層、第7図5～17層）上面が露出する。本層群はI区全面に堆積が確認され、出土遺物等より近世以降の堆積層と考えられる。なお、本層群検出面の標高は9.9m前後であった。

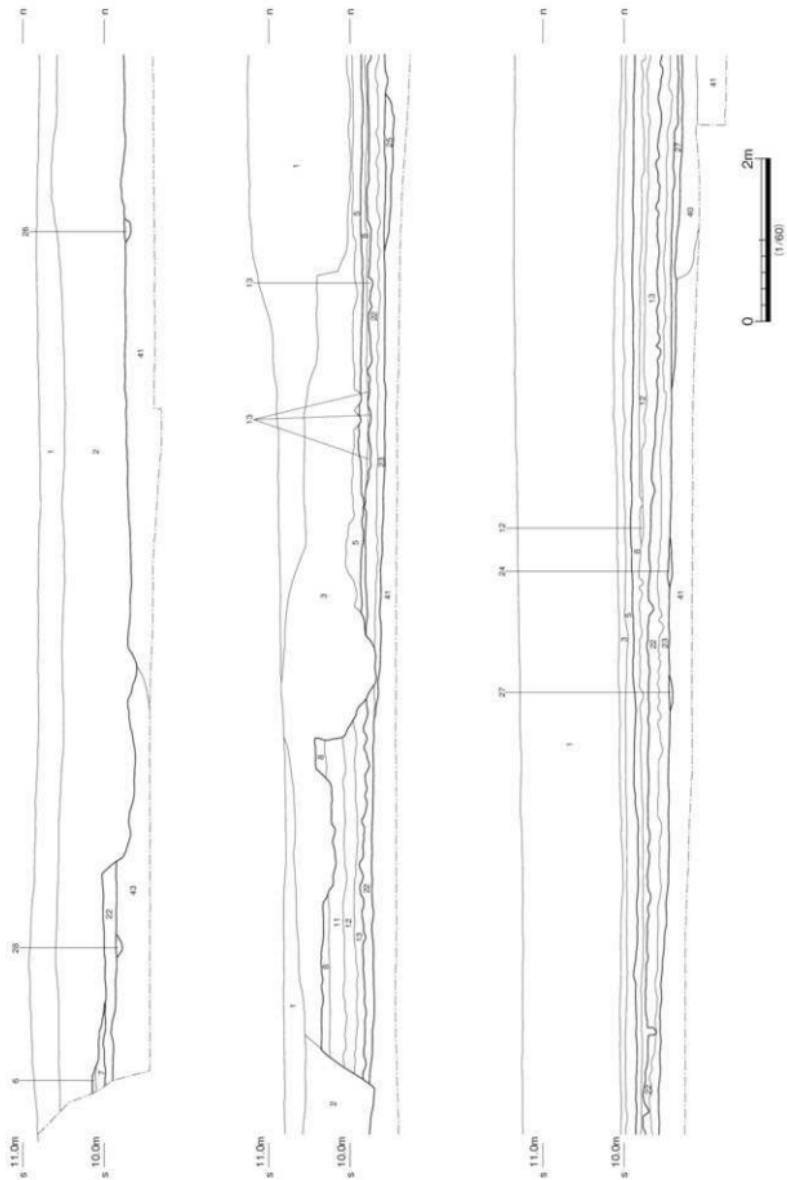
SR01堆積層下で、2層に細分される灰色系の水平堆積層（第5・6図22・23層、第7図18・19層）を確認し、畦畔の可能性のある高まりも断面観察で認められたことから、水田等の作土層の可能性を想定した。調査記録では中世水田層としているが、本層からは遺物が出土しておらず、細かな時期を特定することは困難である。後述する鶴溝群やSR02上層より後出することから、上限を13世紀後半に置くことができる。本層上面を第2遺構面とする。なお、本層検出面の標高は9.3m前後であった。本層下面は、後述する自然河川SR02の影響によりわずかに東へ傾斜する。

第2遺構面下面において、多条の鶴溝群（第5・6図24～28層、第7図20～22層）と自然河川SR02（第5・6図29～39層、第7図23～40層）を検出した。これを第3遺構面とする。検出面の標高は9.1～9.2mであった。既述したように、調査時には本層検出面まで重機により掘削した。

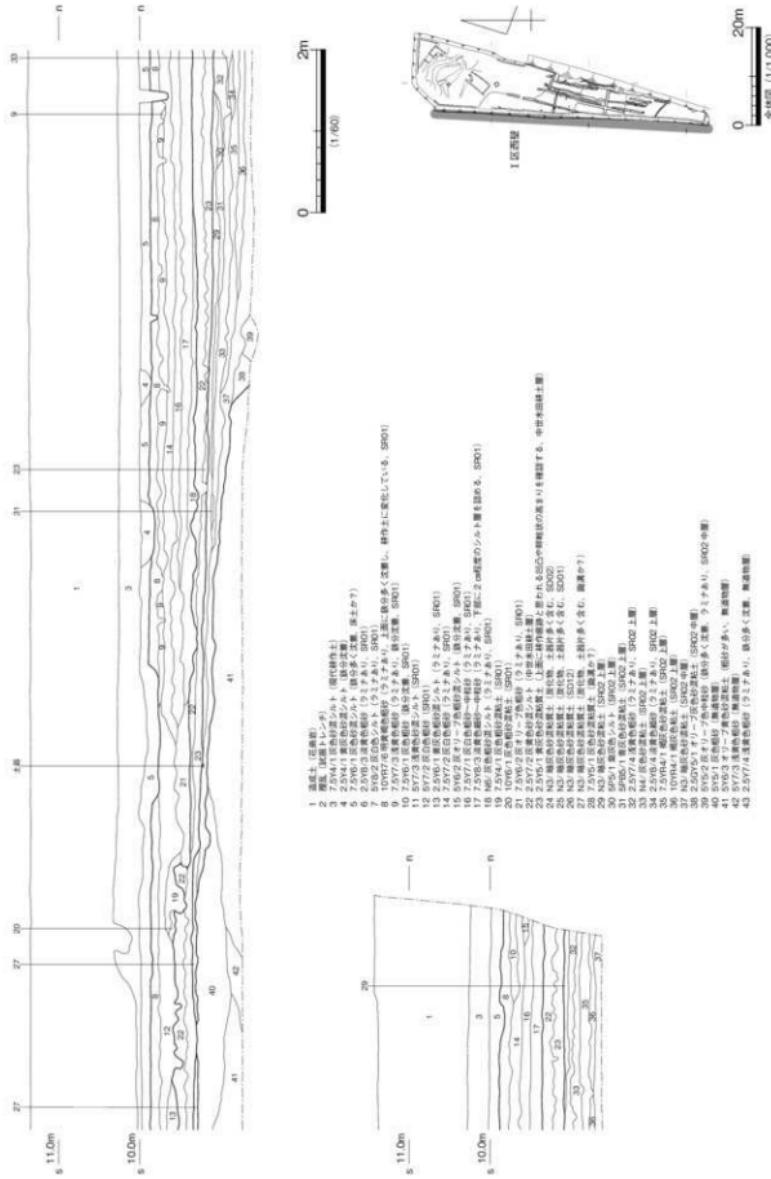
第3遺構面のベース（第5・6図40～43層、第7図41・42層）には、灰色ないし黄色系粗砂・粘土が堆積し、SR02堆積以前の旧古川の流路堆積層と考えられ、調査記録では、本層から遺物は出土しておらず、無遺物層となっている。しかし、後述するようにII区では、同様のSR02に先行する流路の水成堆積層中より、縄文時代の遺物が出土したことが記録され、本層群も縄文時代の流路堆積層である可能性が想定される。

II区では、現耕作土等（第8・9図1～3層、第10図1～3層）下で、近世以降の旧耕作土層と考えられる灰～黄色系シルトないし粘質土を主体とする水平堆積（第8・9図4～9層、第10図4～8層）を確認した。一部に旧古川（SR01）の溢流堆積層（第8・9図6層）を認める。本層群検出面を第1遺構面とする。SR01の出土遺物については、第28～30図に掲載した。

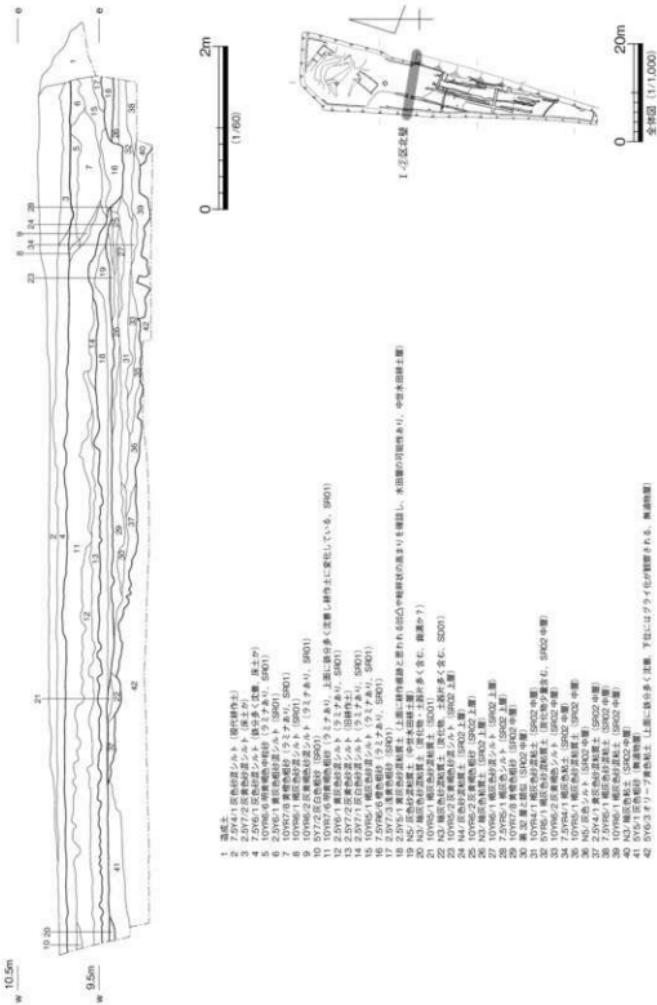
上述した近世以降の旧耕作土層群下面で、灰色系粘質土等の水平堆積層（第8・9図10～13層、第



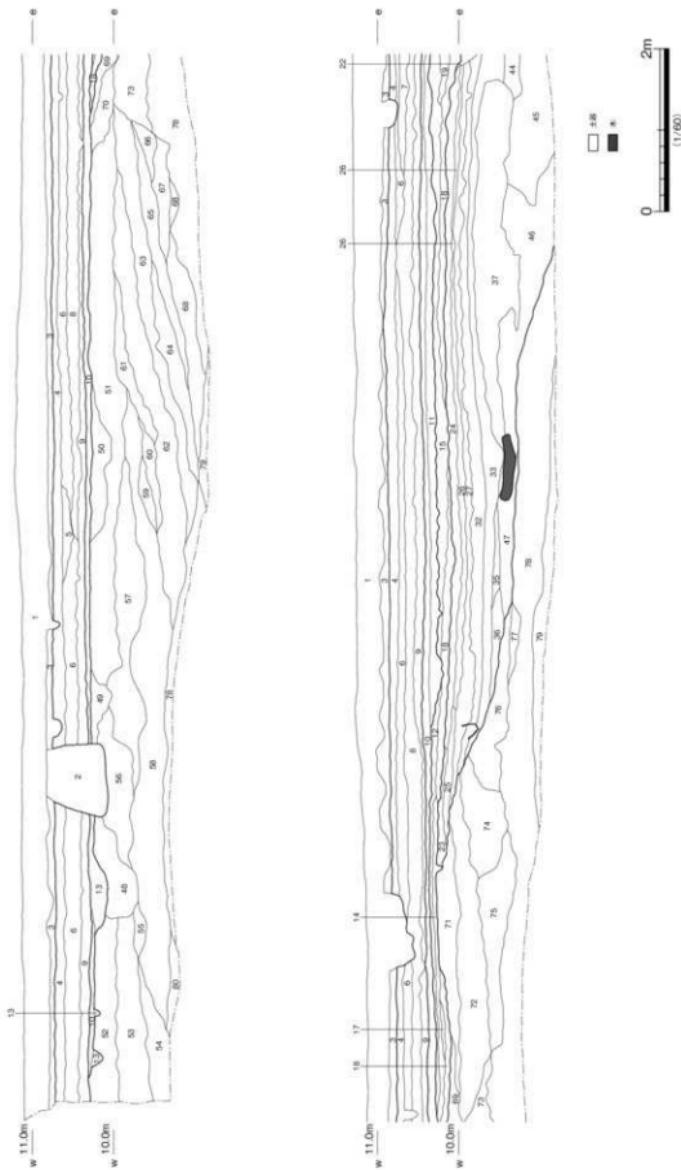
第5図 I区西壁土層断面図1



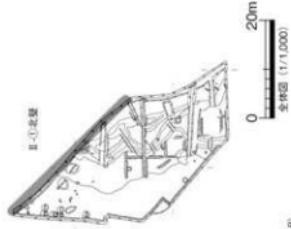
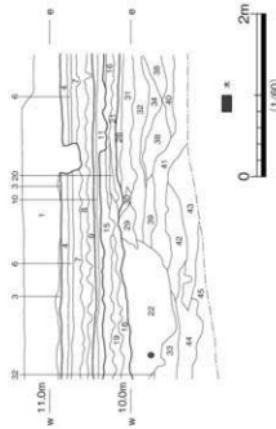
第6図 I区西壁土盤断面図



第7図 I - ②区北壁土層断面図

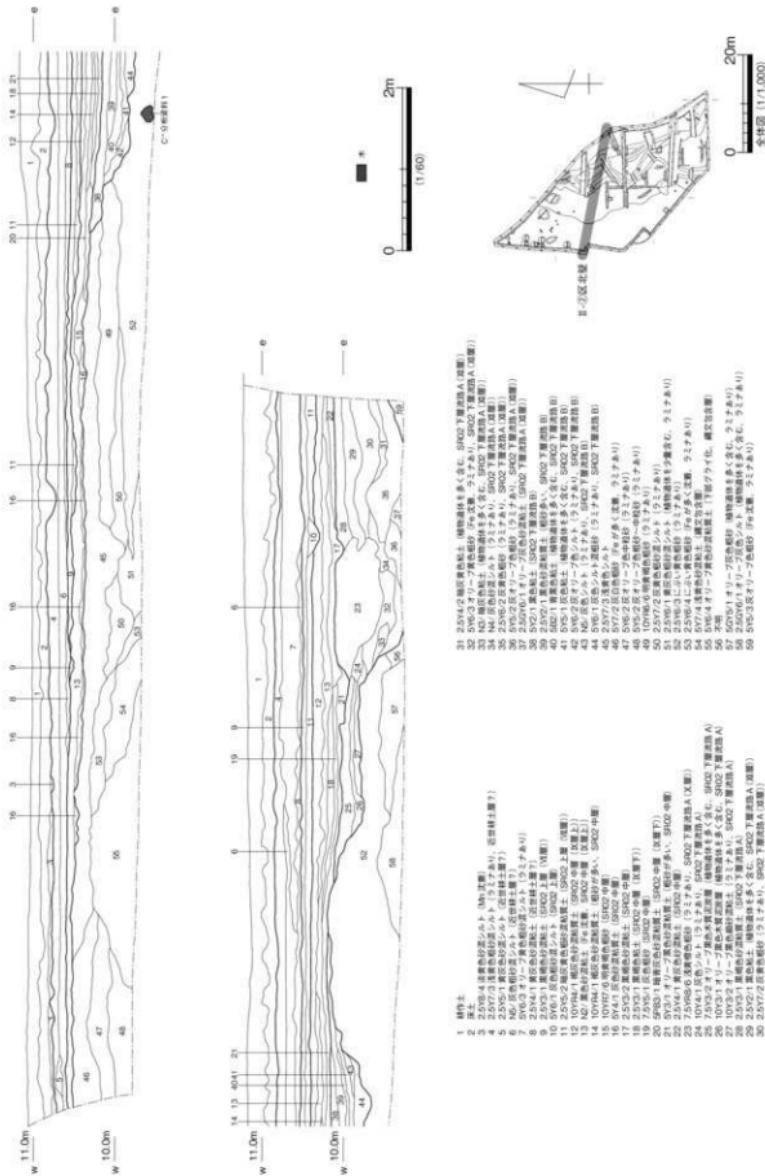


第8図 II - ①区北壁土層断面図1



1. 約W7.8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
2. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
3. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
4. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
5. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
6. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
7. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
8. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
9. 2.57m×8m奥の壁土ブロック（廻丸）  
10. NA/床の板の痕跡（廻丸）  
11. 5.74m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
12. 5.74m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
13. 5.74m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
14. 5.74m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
15. 5.74m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
16. 5.74m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
17. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
18. NA/床の板の痕跡（廻丸）  
19. NA/床の板の痕跡（廻丸）  
20. 1.09m×2.7m白い壁土ブロック（廻丸）  
21. 1.09m×2.7m白い壁土ブロック（廻丸）  
22. 2.57m×6m白い壁土ブロック（廻丸）  
23. 2.57m×6m白い壁土ブロック（廻丸）  
24. 2.57m×6m白い壁土ブロック（廻丸）  
25. 2.57m×6m白い壁土ブロック（廻丸）  
26. 2.57m×6m白い壁土ブロック（廻丸）  
27. NA/床の板の痕跡（廻丸）  
28. NA/床の板の痕跡（廻丸）  
29. 1.09m×2.7m白い壁土ブロック（廻丸）  
30. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
31. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
32. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
33. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
34. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
35. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
36. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
37. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
38. 2.57m×1.1m色の壁土ブロック（廻丸）  
39. 1.09m×2.7m白い壁土ブロック（廻丸）  
40. 1.09m×2.7m白い壁土ブロック（廻丸）
41. 107mE1 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
42. 107mE1 興奮地盤（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
43. 107mE1 床の板の痕跡（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
44. 7.57mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
45. 7.57mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
46. 7.57mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
47. 107mE1 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
48. 2.57mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
49. 2.57mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
50. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
51. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
52. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
54. 5.67mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
55. 5.67mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
56. 5.67mE1 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
57. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
58. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
59. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
60. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
61. 2.57mE7 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
62. 2.57mE7 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
63. 107mE7 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
64. 5.67mE7 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
65. 5.67mE7 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
66. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
67. 2.57mE1 床の板の痕跡（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
68. 2.57mE1 床の板の痕跡（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
69. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
70. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
71. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
73. 5.67mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
74. 107mE6 地盤の変動（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
75. 2.57mE5 1.7m（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
76. 107mE7 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
77. 107mE7 北端部東側の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
78. 5.67mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）  
80. 2.57mE4 にいたる地盤の土シート（「ミミカヒ」、SK02下層地盤A-B）

第9図 II・①区北壁土層断面図2



第10図 II・②区北壁土層断面図

10図9～11層)が検出され、SR02上層として調査した。遺物は中世前葉を主体とする土師質土器等が出土しており、当該期の耕土層群と考えられる。本耕作土層群下面で、土坑SK01や柱穴等の遺構(第8・9図13層)を検出した。上記した中世耕作土層群検出面を第2遺構面とする。

第2遺構面下面是、灰色系粘質土や褐色系粘土・粗砂層がラミナ状に堆積を繰り返しており(第8・9図14～21層・第10図12～22層)、SR02中層として調査した。本層群からは、古代を下限とする遺物が出土しており、SR02埋没の最終堆積層と考えられ、本層群の堆積により、遺跡周辺の地形面はほぼ平準化されたと考える。本層群検出面を第3遺構面aとする。

第3遺構面a堆積層の下位は、SR02機能時の堆積層と考えられ、粘土・粗砂等のラミナ堆積を顕著に認める(第8・9図22～47層・第10図23～44層)。SR02下層として調査した。南半調査区では流路が2条に分かれ(東側流路を流路A、西側流路を流路Bとする)、北半調査区では合流して北へ流下する。また、北半調査区の土層記録から、両流路に明瞭な先後関係は認められず、同時並存しているものと考えられる。本層群からは、弥生時代前期の遺物がまとまって出土した。本層群を第3遺構面bとする。

第3遺構面bのベースにも、粘土や粗砂のラミナ堆積等が連続(第8・9図48～80層・第10図45～59層)し、旧古川の流路堆積と考えられる。本流路堆積層からも、縄文時代の遺物の出土が記録されている。しかし、本報告書作成時に確実に本層出土と考えられる遺物は、ベース層出土とされる第31図181のサヌカイト製のスクレイバー1点のみであり、詳細を明らかにはできない。しかし、上述したSR02からは、少量の縄文時代後期に位置付けられる遺物が出土しており、それらの遺物は本来本層群の流路に帰属していた可能性は想定される。なお、本層群堆積層(第10図52層)より出土したクスノキの自然木1点(試料No年代05)について、放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細は第4章を参照されたいが、縄文時代後期後半となる報告を得た。

#### 第4節 遺構・遺物

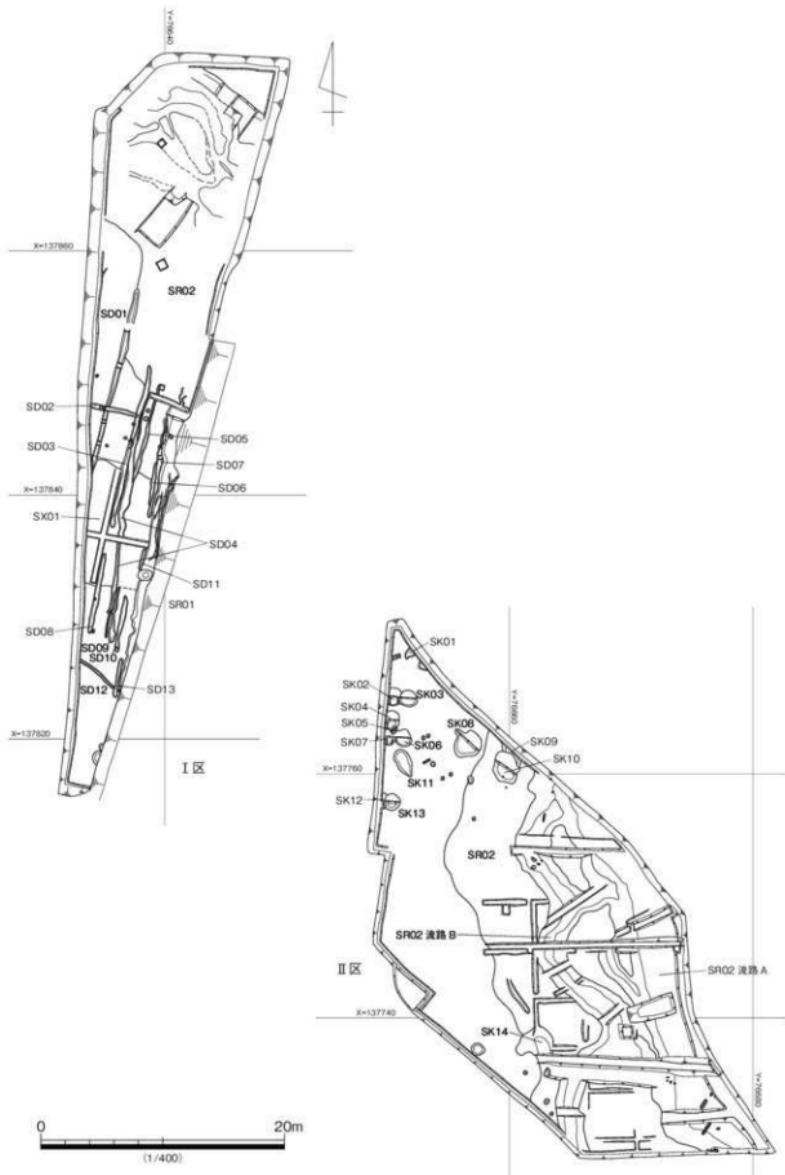
弥生～古墳時代

自然河川

SR02(第12～20図)

I区第3遺構面、II区第3遺構面bで検出した、古川の旧流路と考えられる自然河川である。II区南東部より調査区東端部を緩やかに蛇行しながら北流し、I区北半部で大きく北西方向へ屈曲する。流路方向は、現河道と大きくは変わらない。両調査区は約90m離れているが、検出位置や埋土、出土遺物より一連の自然河川と判断した。検出面幅は、I区で16.7m以上、II区で15.8m以上、残存深は、I区で1.65m、II区で1.80m以上、流路底面の標高は、I区で約7.4mをそれぞれ測る。II区では、掘削法面の崩落の危険により底面まで掘り下げておらず、流下方向は特定できないが、地形面の傾斜方向から北へ流下していたと考えられる。

埋土は30層以上に細分され、前節で一部既述したように上・中・下の3層に大別する。上層は、暗色系粘土を中心とする水平堆積層で、一部に粗砂等の洪水堆積層を介在するが、基本的に低湿地状を呈して穏やかな環境下で堆積したと考えられる。II区では、本層最上位層が調査区全面に堆積(第8・9図10層)し、当該期の耕作土層を形成する。中層も、上層と同様に暗色系粘土による低湿地状の堆積



第 11 図 遺構配置図

を主体として認めるが、一部に細～中粒砂の水成堆積層を認め、冠水と離水が繰り返される環境下にあつたとみられる。下層は、砂層等のラミナ堆積が卓越する水成堆積層である。II区では、下層流路は本流とみられる東側の流路Aと、西側に小規模な流路Bの二つの流路が検出され、II区北半部で合流する。両流路に明確な切り合い関係は認められない。

遺物は、28ℓ入コンテナ8箱程度出土した。これらの遺物は、細かな層位ごとに取り上げがなされており、詳細は巻末観察表を参照されたい。以下では、上述した大別3層に分けて記載する。層位別には下層出土資料が最も多く、本流路出土資料の約半数を占める。中層からの遺物の出土は乏しく、上層では再び出土量が増加する。こうした遺物出土量の層位別推移は、調査区周辺での諸開発行為と連動したものであることが予想される。

1～5・7・9～18・20～33・36・37・73・74・77・80～91・102が下層出土の遺物である。このうちI区北端部下層より、古墳時代前期を中心とする遺物4・5・9・11～18・20・21・23・25～29・31・32・36・73がまとまって出土した（図版6）。16・17・27・32等完形もしくは完形に近く復元される資料を含み、焼成後に穿孔された直口壺16も認められることから、祭祀等に使用された後一括して投棄されたと考えられる。また、II区でも、北端部下層より弥生時代前期の資料がまとめて出土したことが記録される。80・85・87・90がII区下層流路A、81～84・86・88・89・91・102が同流路B出土の遺物である。

1～3・80～81は縄文土器の小片である。1は後期初頭中津式の縄文土器浅鉢として図化した。器表面の摩滅が顕著なため、別の器形となる可能性もある。3は縄文土器深鉢。80・81は無文系深鉢の小片で、81は中期末～後期前葉頃、80は後期中葉を前後する時期と考える。いずれも小片であり、前節で既述したように混入資料の可能性が高い。

4・5・7・9・10・82～89・91は弥生時代前期に位置付けられる資料で、甕が主体を占める。84のようにほぼ完形に復元される資料等を含むが、器表面の磨滅や剥落等を顕著に認める資料もある。88の体部外面は、被熱のためか器表面の剥離が顕著である。壺は体部片2点82・83があり、82は外側に5条以上の、83は8条以上のそれぞれヘラ描き直線文で飾る。中形甕では、中層出土資料を含め、如意形口縁で、7・9・10・87・88にみられるように頭部下に3条ないし4条の主にヘラ描き沈線を施し、10・88等口縁端部を刻み目で飾るものを一定数認める。7は、後述する中層出土の8と同一個体の可能性があるが、接合はしない。一方小形甕84～86では、無文のものを認める。91は甕とみられる底部片で、外底面には植物種実圧痕を認める。壺等の良好な資料を欠落し、器種組成等の制約は大きいが、甕では如意状口縁が主体を占め、櫛描き文出現直前の様相と捉えることから、森下編年前期IIb～IIc期に位置付けられると考える。なお、II区下層流路Bは、出土遺物の大半が当該期の資料で占められる。

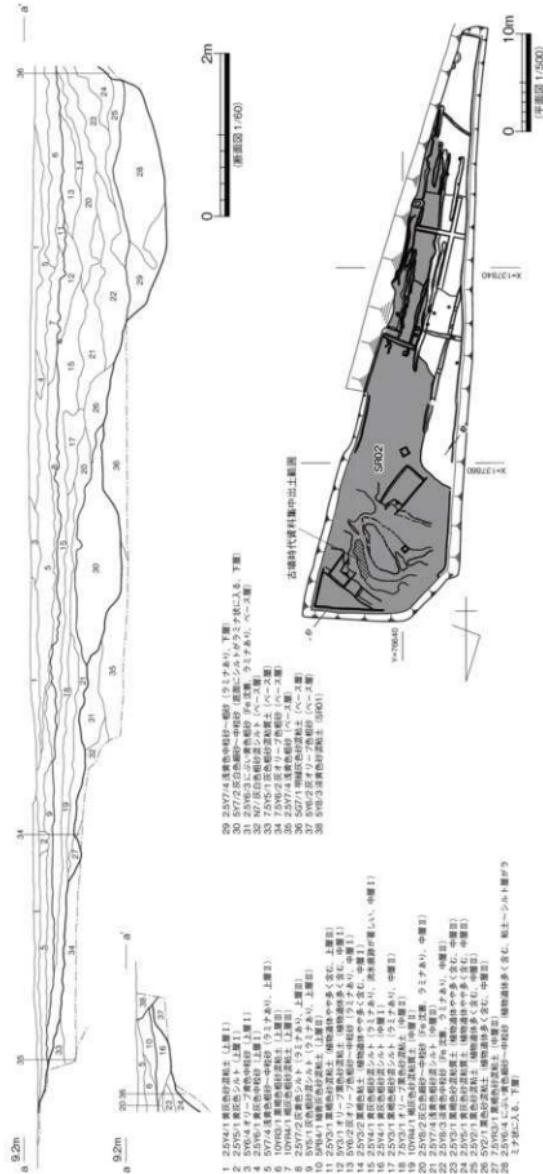
11～14は、弥生時代中期後葉を前後する時期の資料で、出土量は僅少だがI区を中心に出土した。11は甕の体部片。最大径部上位に櫛状工具による刺突文を巡らす。12も甕の体～底部片で、内面には炭化物が付着する。

16～18・20・21・23～27・90は、上述したようにI区北端部を中心に出土した、古式土器類の資料である。各器種が揃い、また完形もしくは完形に近く復元される資料も多く出土している。このうち、在地系の広口壺90や、在地系甕20、布留系甕21、有稜高杯28・29は、他の一群の資料より古く、古墳時代前期前葉に位置付けられる可能性がある。16・17の直口壺は、いずれもほぼ完形品で、体部

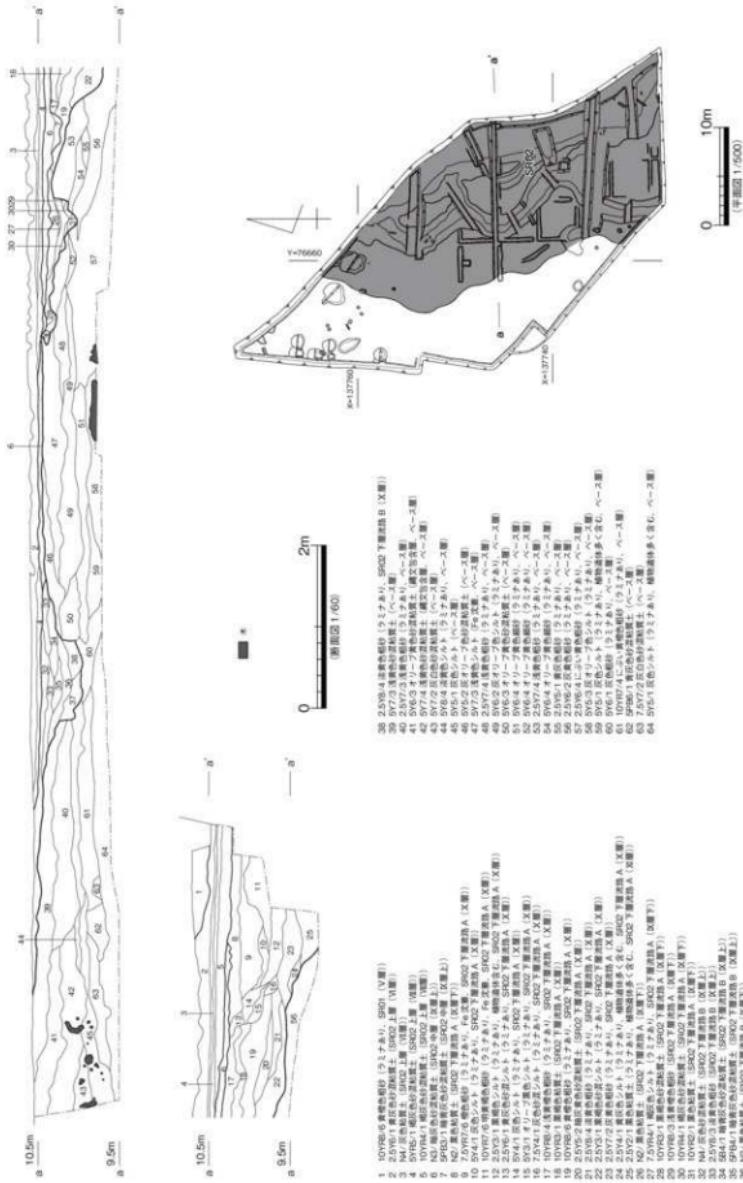
外面には使用に伴うとみられる煤が付着する。また、16の体下半部には、長径1.7cmの不定形な焼成後の穿孔を認める。外面側より穿たれるが、穿孔部破断面には煤が付着しておらず、穿孔は使用後になされたと考えられる。18は二重口縁形態の甕。体部内面はナデ調整が卓越する。大型高杯32では、杯部へのミガキ調整は認められず、脚柱部と裾部の外面部の屈曲は鈍いものとなっている。小型丸底系の甕25～27も、甕同様にケズリ調整やミガキ調整は大きく後退する。これら資料は上述した特徴より古墳時代前期後葉、信里編年古墳前期5～6期に位置付けられると考える。

36・37は須恵器杯蓋で、37は完形品である。37の天井部内面には、同心円の當て具痕を認める。復元される口径等より、36はTK23～TK47型式併行期に、37はMT15～TK10型式併行期にそれぞれ位置付けられ、本資料が下層埋没の下限を示す。

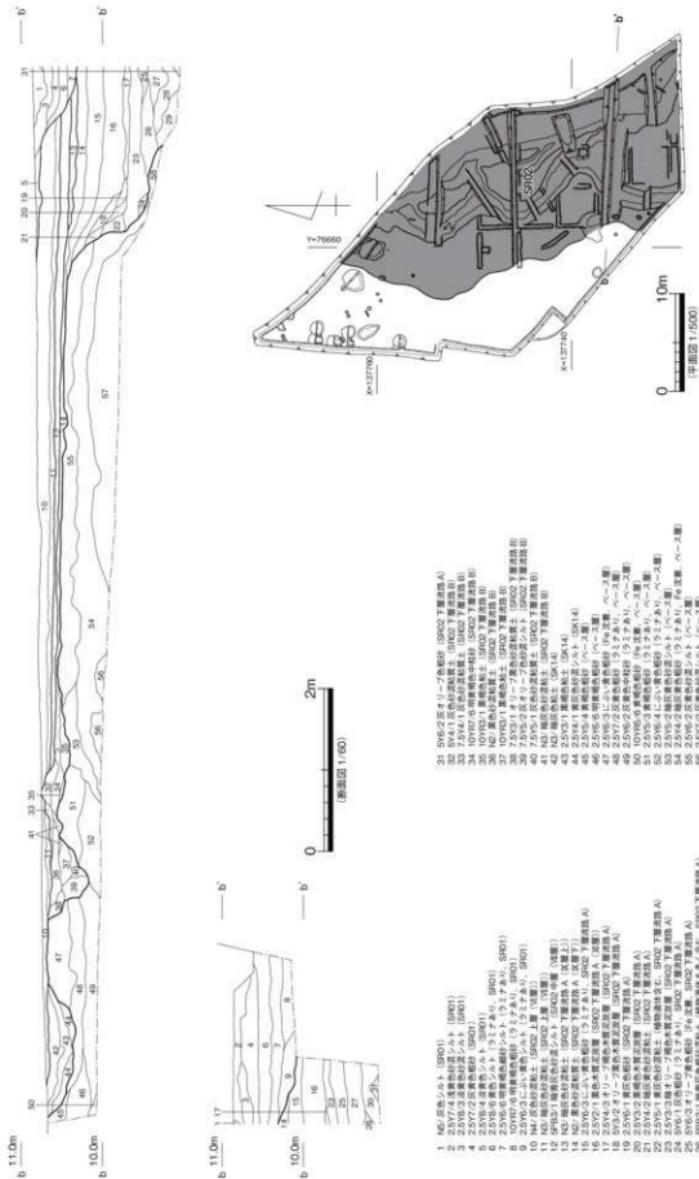
73・74は、下縁に直線状の刃部を有するサスカタイト製のスクレイパー



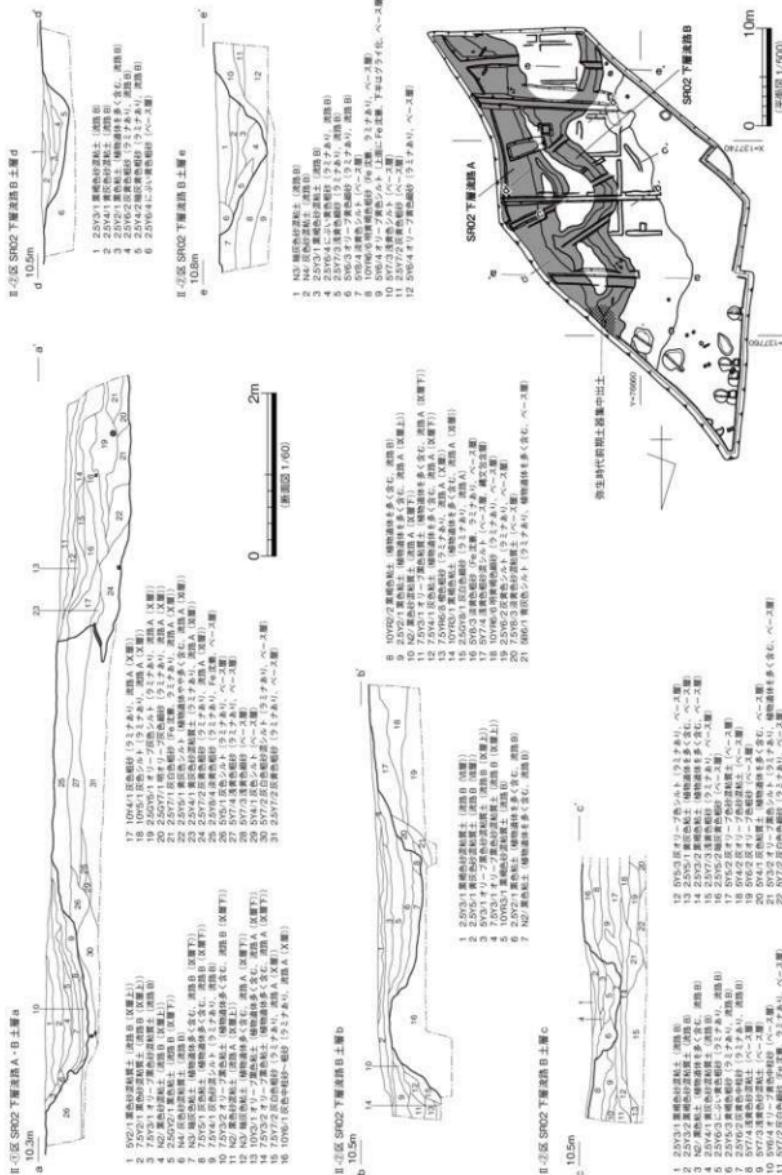
第12図 1区 SR02土層断面図



第13図 II区 SR02 土層断面図



第14図 II区 SR02土層断面図2



第15図 II区 SR02 土層断面図3



第16図 I区 SR02 出土遺物実測図1

として図示した。**73**は左図右側縁に、**74**は上縁にそれぞれ自然面を残す。**77**は、長さ39.8cm以上、幅8.7cm、厚さ26cmのケヌギ節の板目材を使用した板材である。表面は腐食が顕著なため、加工痕は認められない。上半部に、長さ1.4cm、幅0.8cmの矩形の孔を認める。腐食のため、人為的なものか断定は困難だが、枘穴として図示しておく。

**6・8・19・38・40・42・76・78・79・92・94**が中層出土の遺物である。**6・8**は弥生時代前期の甕で、下層からの混入資料であろう。**19**は古式土師器甕で、本資料も下層からの混入と考える。**38**は須恵器杯身。底部外面は回転ヘラ切りされ、TK217型式併行期前後に位置付けられる。**40**も同杯身。底部内面には黒色物が付着し、よく磨滅していることから、転用硯の可能性がある。**42**は須恵器短頸壺の体部小片で、最大径付近に沈線1条を施す。**92**は同杯蓋である。口縁部内面には重ね焼き痕を認める。**94**は同高杯脚部小片。3方向とみられる長方形透孔を穿つ。TK43～TK209型式併行期に位置付けられる。

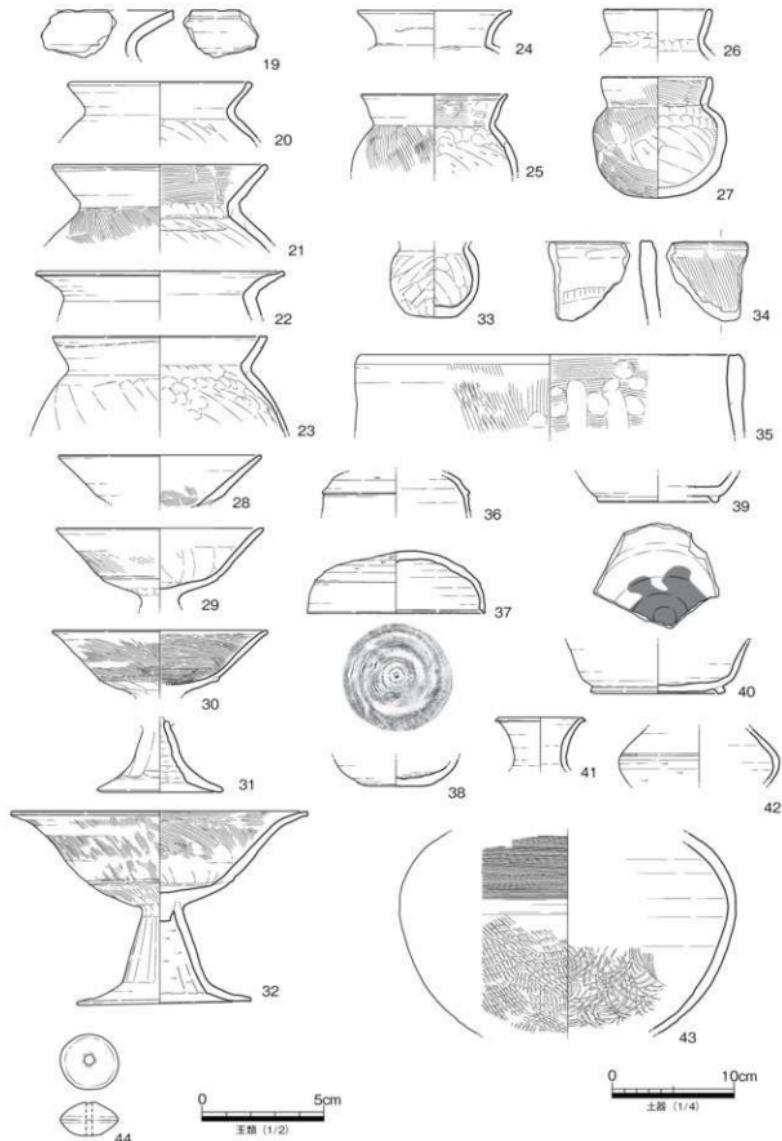
**76**は、砂岩製の敲石で、図右面には敲打痕に切られる顕著な擦痕が認められる。砥石として利用していたものが破損等により、敲石に転用したと考えられ、表裏面と左側面に敲打痕を認める。**78**は中層3出土の板材で、幅5.1cm、厚さ1.8cmのサワラの板目材を使用する。上下端は折損し、器表面は腐食のため加工痕は認めない。**79**も同層出土の木杭で、径22～33cmのやや扁平なアカガシ亜属の芯持ち枝材を使用する。下端は側面レ字状に斜めに切り落とし、尖らせる。

以上、中層出土資料は下層からの混入と考えられる資料を除けば、**38・42・94**の6世紀後半～7世紀中葉の資料を上限とし、**40・92**の8世紀後葉～9世紀前葉の資料を下限とする。資料数が限られ断定は困難だが、概ね出土資料の示す時期に埋没が進行したものと考えられる。上層出土資料との時期幅は短く、連続して埋没が進んだことが考えられる。

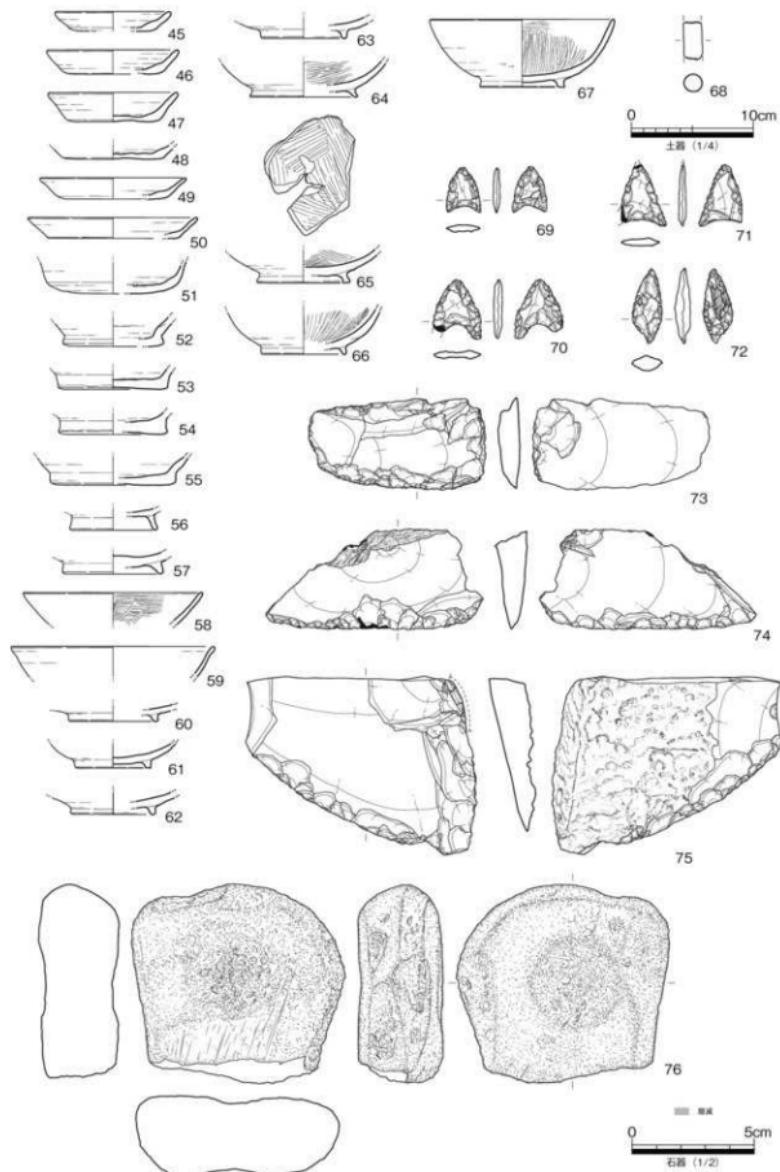
**34・35・41・43・44・45～47・51～65・67・69～72・75・93・96～101**が上層出土の遺物である。**34・35**は、移動式壺の掛口部の小片として図示した。**35**の内面には炭化物の付着痕が認められ、被熱により変色する。本来は、中層に帰属する資料と考えられる。**41**の須恵器広口壺や**43**の広口壺とみられる同壺体部片も、下層ないし中層からの混入と思われる。**43**の外面肩部にはカキ目を施し、体部下半は平行タキを認める。TK23～TK47型式併行期を中心とした時期に位置付けられよう。**44**の算盤玉形土製品も、下層の古墳時代前期の古式土師器群に伴う資料と思われる。**93**は須恵器高杯として図化したが、小片のため他の器種となる可能性がある。杯部外面に、ヘラ描きの波状文で装飾する。

**69～72・100・101**はサスカイト製の打製石鎌。**72**は、基部形状が不整形で、厚みがあること等より、未完成か製作途中で破損して廃棄した可能性がある。なお、図右面には顕著な磨滅痕が認められ、打斧等の転用品である可能性が高い。**100**は、凸基式の大型打製石鎌である。長径2mm程度の粗粒の長石の斑晶をやや多く含む。本資料も、表裏面中央部に顕著な磨滅痕を認め、打斧等の転用品の可能性が高い。**75**はサスカイト製のスクレイパーで、図右面に自然面を残す。

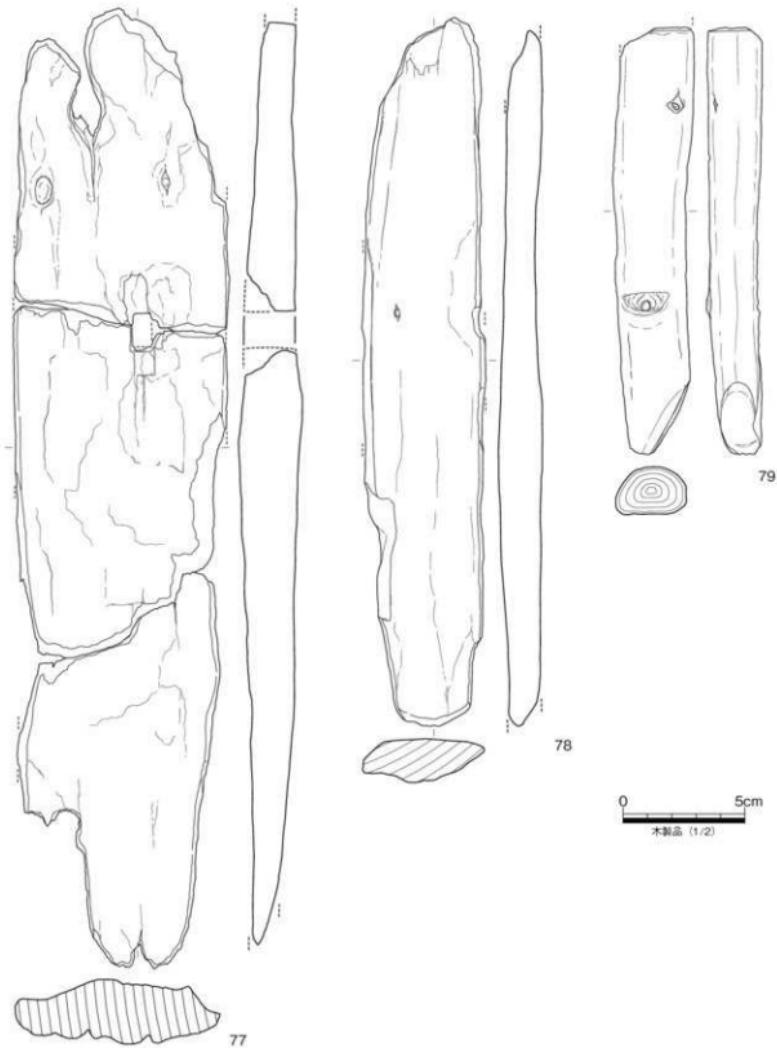
I区を中心に出土した、土師質土器皿**45～47**、同杯**51・96**、同碗**52～57・97・98**、黒色土器碗**58～67**、十瓶山周辺窯産の須恵器碗**99**が、本層堆積時期を示す資料と考える。土師質土器皿**46**の外面は黒化しており、使用時に被熱した可能性がある。黒色土器碗内面のミガキは、放射状に施す**66・67**等と、格子状に施す**65**等の2者を認める。さて、これら資料の年代的位置付けだが、皿は口径10cm前後にまとまり、唯一完形に復元可能な黒色土器碗は径高指数38で、高台径6.9cm、平高台碗は底部の立ち上がりが高く、これらの特徴から概ね11世紀後半位に位置付けられる資料と考える。1点のみ



第17図 I区 SR02出土遺物実測図2



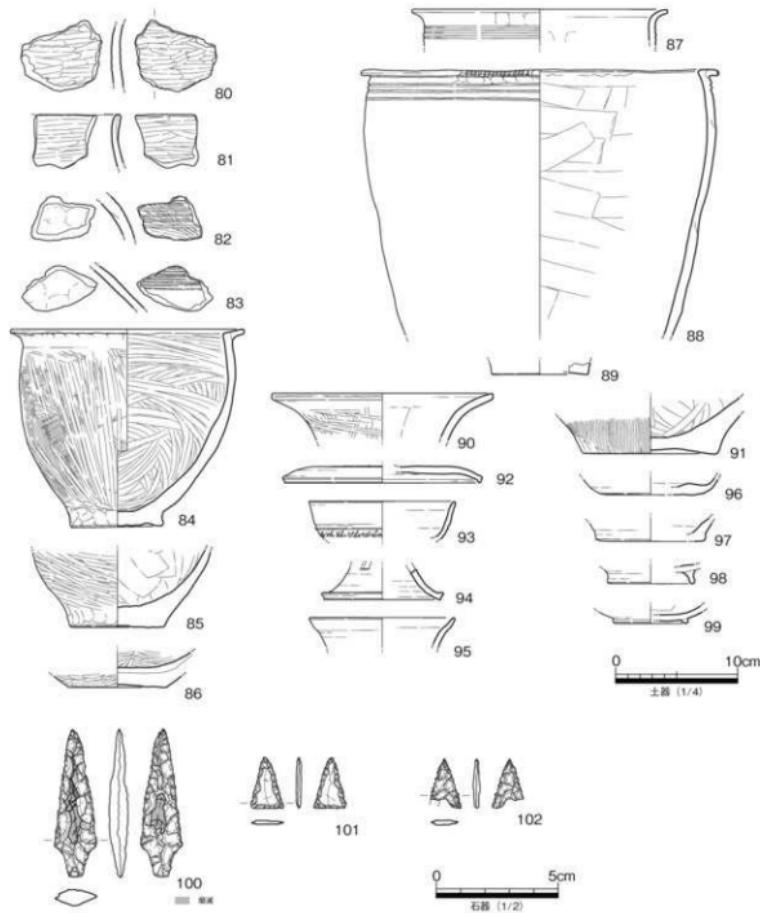
第 18 図 I 区 SR02 出土遺物実測図 3



第19図 I区 SR02 出土遺物実測図 4

出土した須恵器碗は、13世紀前半代に位置付けられ、本層埋没の下限を示す資料であろう。

図示していないが、II区上層（Ⅶ層）からウシもしくはウマの歯牙片1点が出土した。劣化が顕著なため、種名や部位を特定できなかった<sup>(註1)</sup>。



第20図 II区SR02出土遺物実測図

上記した以外の39・48～50・66・68は、出土層位不明の遺物である。39は須恵器杯身片。48～50は土師器皿。66は黒色土器碗。68は棒状土錘とみられる径1.5cm程度の円柱状の土器小片である。本調査区より出土した土錘は、本資料1点のみである。

### 中世

#### 柱穴（第21図）

前節で既述したように、I区第3遺構面、II区第2遺構面で少数の柱穴群を検出した。いずれも建物遺

構を構成するものではないが、出土遺物や検出面より当該期の遺構であり、後述する土坑等も検出されていることから、小規模な屋敷地が調査

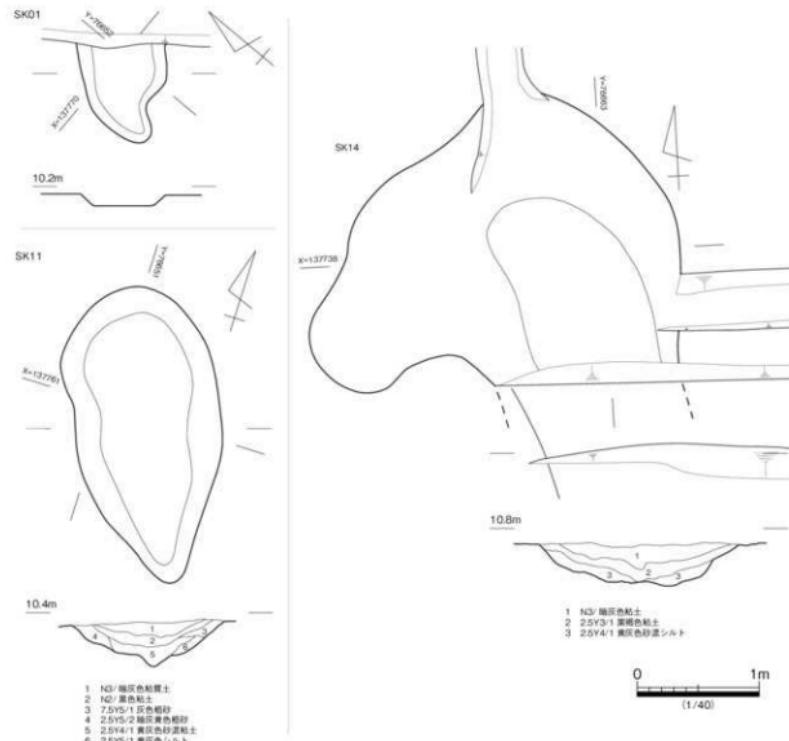
区周辺に展開する可能性を示唆するものと考える。以下、出土遺物についてのみ報告する。

103はⅡ区SP15出土の弥生土器壺底部片とした。外面には螺旋状のタタキ調整を施す。SR02からの混入資料であろう。104・105は、I区SP09出土の土師質土器皿。106は、I区SP05出土の土師質土器皿底部片である。

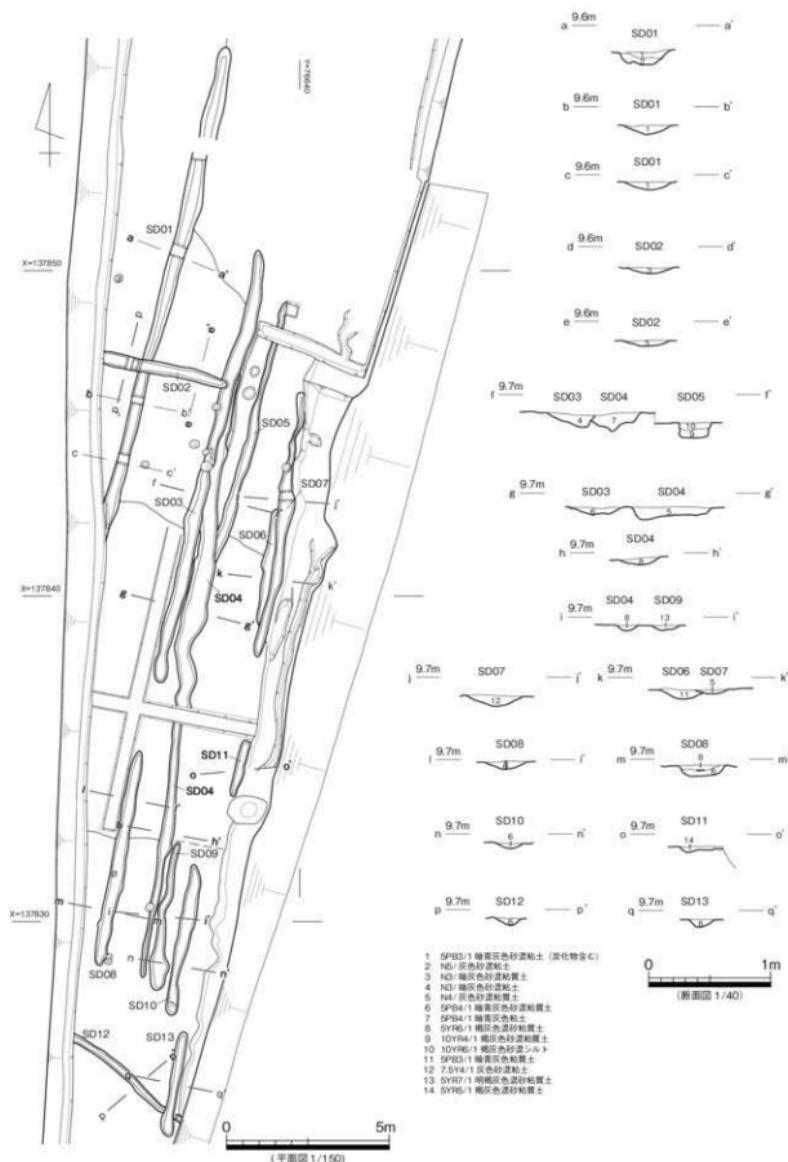
### 土坑

#### SK01（第22図）

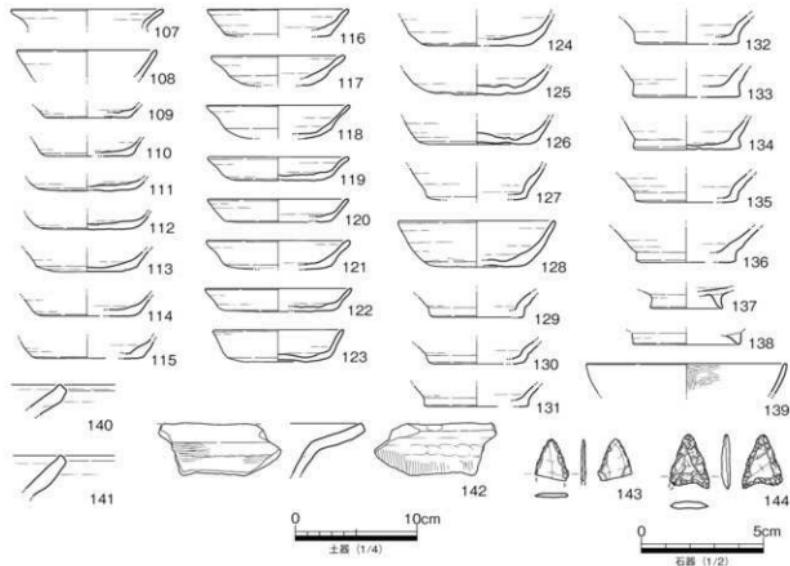
Ⅱ区北端第3遺構面a、SR02上層下面で検出した土坑である。北半部は調査区外へ延長し、全形は



第22図 SK01・SK11・SK14 平・断面図



第23図 I区舗溝群平・断面図



第24図 I区鉢溝群出土遺物実測図

不詳。長軸 0.81 m 以上、短軸 0.73 m 以上で、平面不定形を呈し、残存深は 0.09 m と浅い。埋土は、調査区壁面の記録より、暗青灰色粘質土の単層であった。

遺物は、弥生土器とみられる土器小片 2 点が出土したのみで、詳細な時期を特定することは困難だが、遺構上面を SR02 上層（第 8 図 10 層）が被覆することから、13 世紀前半を下限とする近接した時期を想定する。

#### SK11（第 22 図）

II 区北半部で検出した土坑である。長軸 2.44 m、短軸 2.10 m で、平面不整橢円形を呈する。残存深 0.38 m で、断面形は椀底状を呈する。埋土は 6 層に細分され、灰色系の粗砂や粘質土がレンズ状堆積する。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。近接して後述する近世土坑群が開削されているが、それらとは平・断面形状や埋土が大きく異なり、上述した SK01 に近似することから、SK01 と近接した時期の遺構の可能性を想定する。

#### SK14（第 22 図）

本土坑も、II 区南半第 3 遺構面 a、SR02 上層下面で検出した土坑である。長軸 3.12 m、短軸 2.4 m 以上の平面不定形を呈し、記録位置で残存深 0.28 m の断面椀底状をなし、北半部では西側に緩やかに掘り込まれたテラス面が付す。埋土は 3 層に細分され、暗色系の粘土・シルトがレンズ状に堆積する。

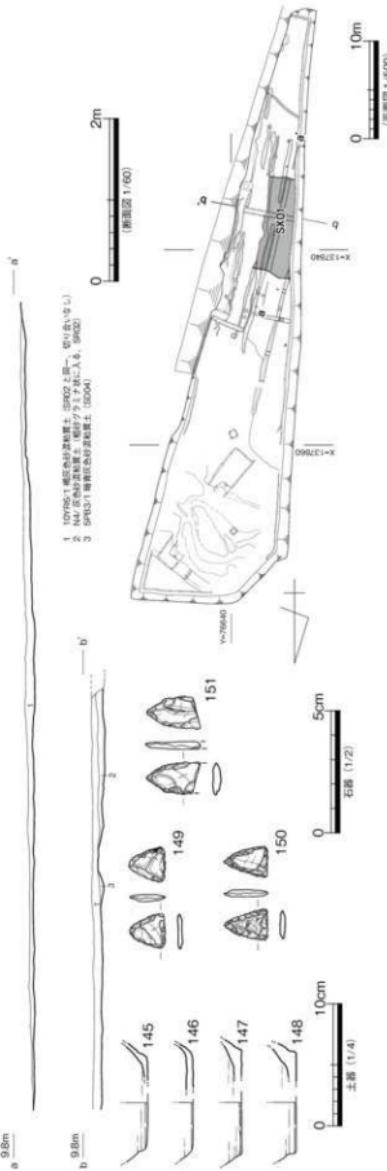
遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、上述した SK01 同様、遺構上面を

SR02上層（第14図10層）が被覆するこ  
とから、13世紀前半を下限とする時期を  
想定する。

## 鍛溝群（第23・24図）

I区南半部第3遺構面で、多条の並走する溝群を検出した。東半の溝群はSR02上面及びSX01下面より穿たれ、SX01より先行しSR02中層より後出する。溝は、南北溝を主体に東西溝2条を検出しており、いずれも直線溝である。流路方向は、N 13°～14°E前後のA群溝（SD01～SD03等）と、N 8.4°E前後のB群溝（SD04・SD13等）、N 51.04°WのSD12の3方向に大別される。A群溝のSD01とSD03の芯々間2.65m、B群溝のSD04とSD13の芯々間は1.65mをそれぞれ測る。SD12を除いて、検出面幅0.15～0.75m、残存深0.03～0.22m、断面形は概ね浅い皿状を呈して共通し、埋土は灰色系砂粘土～粘土質シルトであった。以上の内容から、これら溝群は畑作等の耕作に伴う鍛溝と考えられ、流路方向の相違等から、2回以上の耕起作業がなされた可能性が考えられる。

遺物は、SD12を除く各溝より出土しているものの、出土量はコンテナ2箱程度にとどまる。また、小片化したものが大半を占め、器表面の磨滅等により調整不明なものも多い。38点を図示した。図示した以外に、器種不詳の弥生土器、サヌカイト剥片等が少量出土している。土師質土器皿107～123、同杯124～128、同碗129～138、黒色土器碗139、土師器甕140～142、打製石鎌143・144がある。土師質土器皿・杯類の外底面は、確認できるものはいずれも回転ヘラ切がなされている。上述した溝の流路方向による細かな時期差は、遺物からは判然としない。平高台碗の



第25図 SX01 平・断面・出土遺物実測図

遺構名	平面形	断面形	計測値 (m)		埋土	遺物	備考
			直輪	斜輪			
SR02 小型溝丸形?	椭円?	直輪?	1.47	1.02±1.5	0.26 2層、人為的埋め戻し	土器小片	SK08より先行し、西半は調査区外へ延長
SR03 小型溝丸形?	椭円?	直輪?	1.37	1.35	0.35 3層、人為的埋め戻し	なし	SK02より後続する
SR04 小型溝丸形?	直輪?	直輪?	1.28	1.11±1.3	0.52 2層、人為的埋め戻し	なし	SK02・SK03より後続し、西半は調査区外へ延長
SR05 小型溝丸形?	直輪?	直輪?	0.65	0.38±1.5	0.41 不明	なし	SK04より先行し、SK07より後出する
SK06 小型溝丸形?	直輪?	直輪?	1.44±1.1	1.40	0.32 2層、人為的埋め戻し	無鉄1・金属性?	SK08より先行する
SK07 小型溝?	直輪?	直輪?	0.68±1.1	1.44±1.1	0.30 2層、人為的埋め戻し	なし	SK07より後続する
SK08 小型溝丸形?	直輪?	直輪?	2.21	2.05	0.67 4層以上、人為的埋め戻し	土器質土器等小片 10	北西方円に遺物の発見部あり
SK09 小型?	直輪?	直輪?	1.17±1.1	1.45±1.1	0.35 2層、人為的埋め戻し	なし	SK10より先行し、北半部は調査区外へ延長
SK10 小型溝丸形?	直輪?	直輪?	2.40	2.10	0.64 2層、人為的埋め戻し	なし	SK09より後続する
SK12 小型?	直輪?	直輪?	1.27±1.1	0.47±1.1	1層? 人為的埋め戻し	なし	SK13より先行し、西半は調査区外へ延長
SK13 小型溝丸形?	直輪?	直輪?	1.34	1.26	0.51 5層、人為的埋め戻し	なし	SK12より後続する

第1表 土坑属性一覧

形状や皿・杯類の規格、いわゆる十瓶山周辺窯業の須恵器碗が出土していないこと、SR02上層との層位的関係等より、11世紀後半～12世紀代の時期幅の中に位置付けられるものと考える。

#### 性格不明遺構

##### SX01 (第25図)

I区南半第3遺構面で検出した。SR02西側に矩形に広がり、西端は調査区外へ延長する。東西3.0m以上、南北9.44m、残存深0.11mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土はSR02上層と同一層とみられる褐灰色粘質土が堆積する。

遺物は、少量の土師質土器皿の小片(145～148)や打製石錐(149～151)等が出土したのみで、内容的にはSR02上層と大きな相違はみられない。以上の点から、人為的な遺構ではなく自然の浅い窪地であり、SR02の最終埋没時に連続して埋没したものと考える。

#### 近世

##### 土坑 (第26・27図)

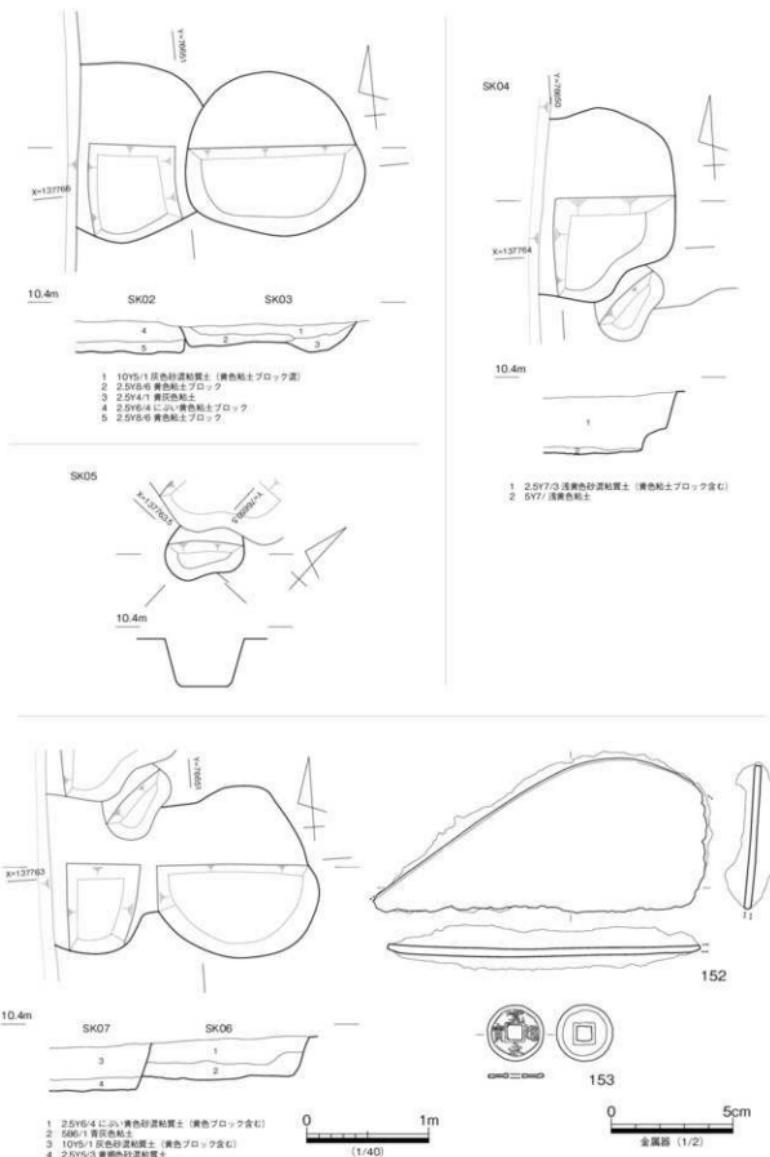
II区北西隅部、第2遺構面で10基の土坑を検出した。数基の土坑で重複が認められ、検出した土坑数からも、土坑群の開削には一定の時間的な幅があった可能性を考えられる。各土坑についての細かな計測値や埋土の堆積状況は、図・表を参照されたい。

土坑は、長軸長約2.2～2.4mの大型のSK08・SK10と、同約1.3mの小型のSK03・SK13等に二分される。SK09は大半がSK10と重複し、詳細は明らかにし難いが、断面形状や埋土等から、他の土坑群とは異なる性格の遺構である可能性も考えられる。大型土坑は東側に2基が、小型土坑は西側に南北に列状に7基がそれぞれ配される。埋土は、ブロック土を含む黄色系粘土が主として認められ、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、SK04やSK08等では、底面や埋土中位に、滲水下での堆積が想定される灰色系粘土が認められ、開削後埋没までの一定期間オープンな状態であった可能性が想定される。

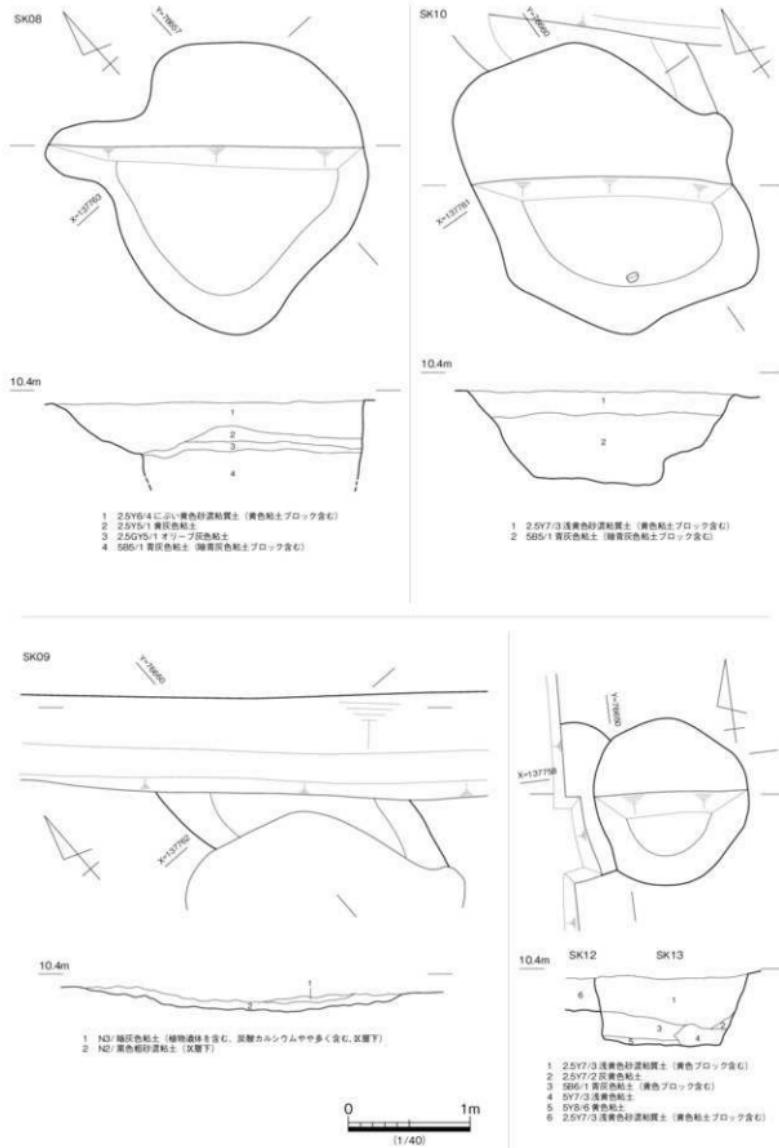
遺物は、図示した以外にはSK02より器種不詳の土器小片1点と、SK08より弥生土器と土師質土器杯等の小片約10点がそれぞれ出土したのみである。152・153は、いずれもSK06出土の銅鏡と不明の鉄器片である。153は18世紀代の新寛永錢であり、土坑群の時期を決定する唯一の資料であり、この点は上述した検出面の層位的な関係からも矛盾はないものと考える。

#### 自然河川

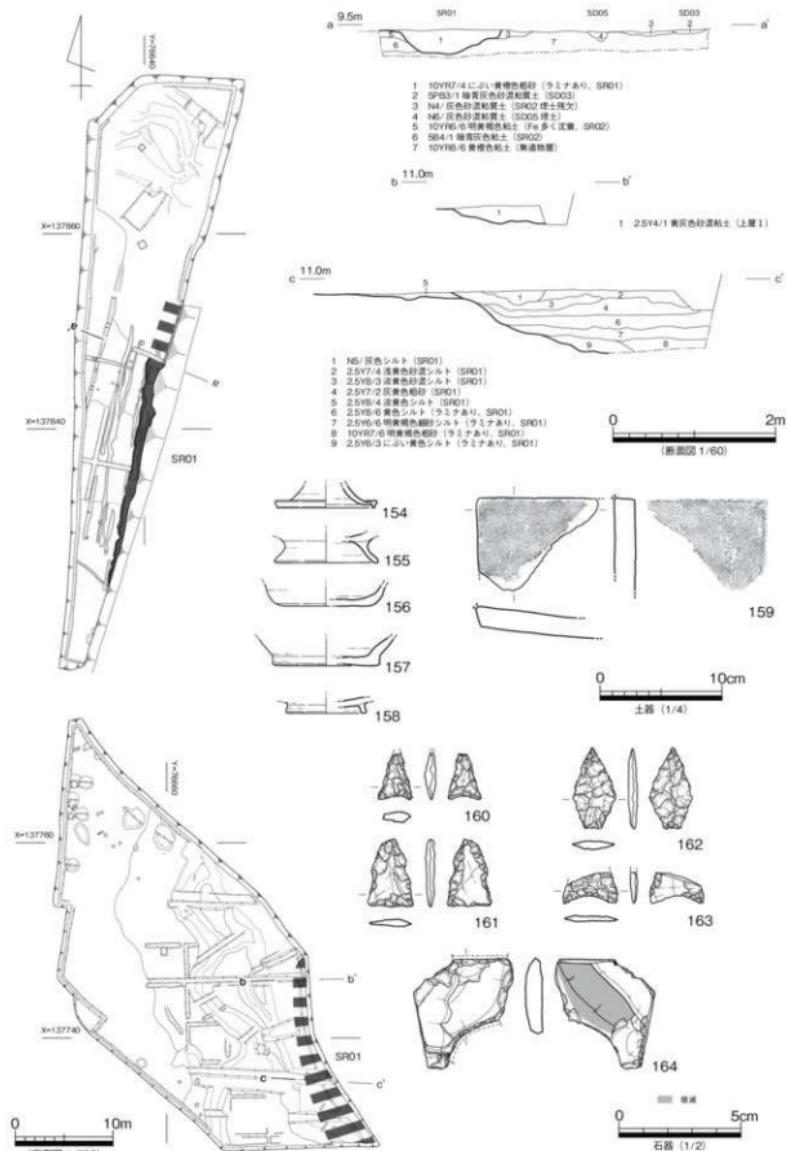
##### SR01 (第28～30図)



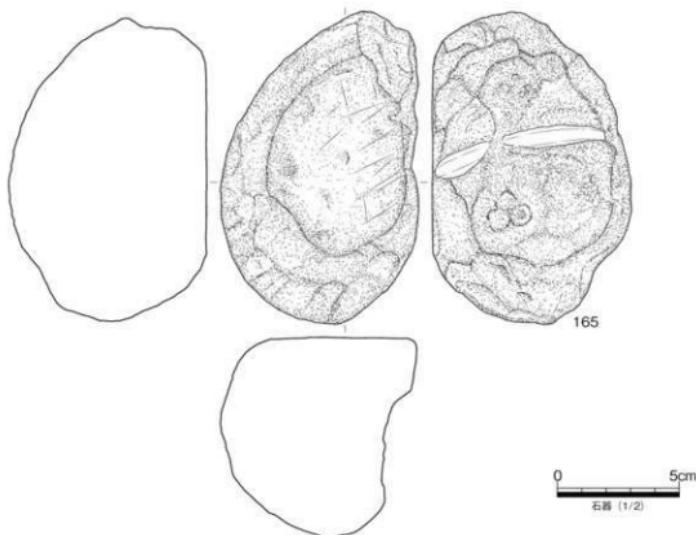
第26図 II区 SK02～SK07 平・断面・出土遺物実測図



第27図 II区 SK08～SK10・SK12・SK13 平・断面図



第28図 SR01 平・断面・出土遺物実測図 1



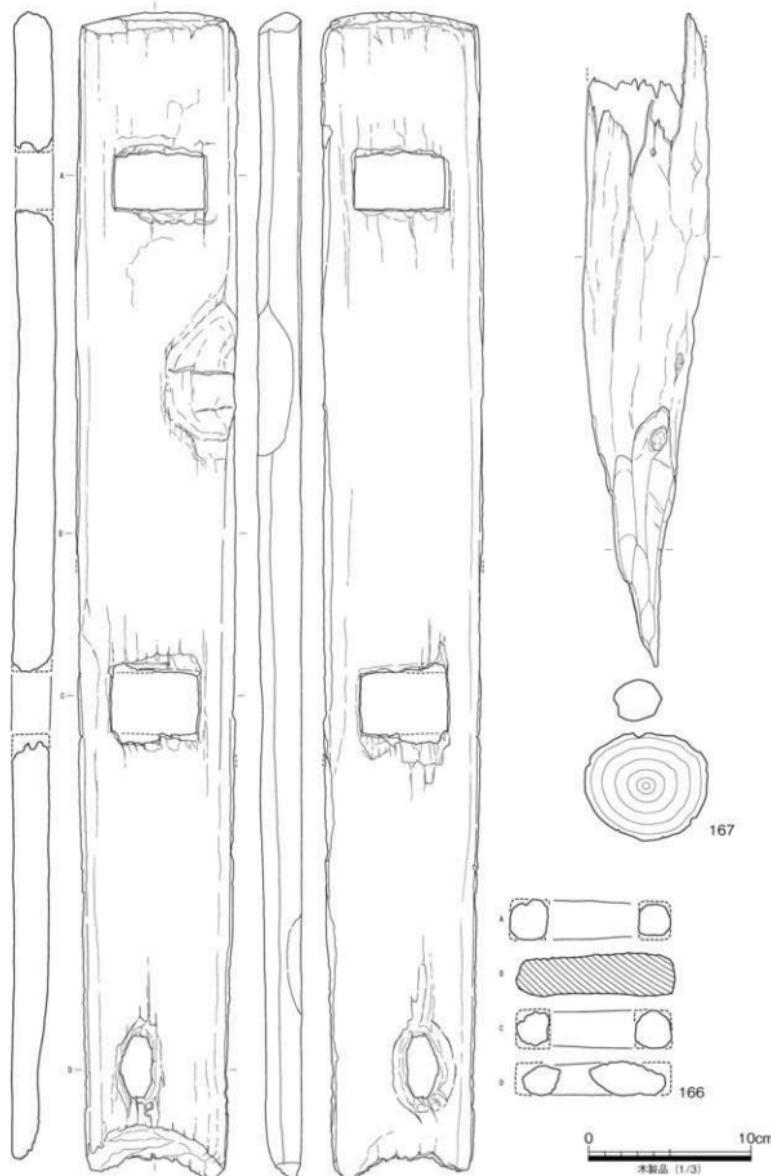
第29図 SR01 出土遺物実測図2

I・II区東端部で検出した自然河川で、いずれの調査区でも流路西岸を中心に検出され、流路本体の大半は調査区外となり、全形は不詳である。既述したSR02と重複し、SR02より後出する。

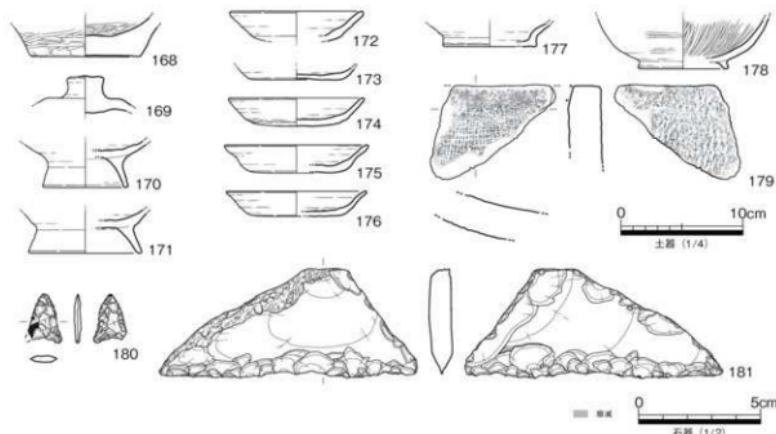
I・II区とともに遺物の出土量は乏しい。I区では弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器皿、黒色土器碗、平瓦片が、II区では上層より弥生土器、土師質土器杯、肥前系染付皿が、下層より弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器杯・足釜、備前焼、丸瓦片が出土しており、いずれもSR02からの混入資料が大半を占める。図示した遺物も、SR02からの混入と考える資料が多く、中世後半期以降と考える焼平瓦159の小片のみ、本流路機能時に比較的近接する可能性がある。なお、埋没は図示していないが肥前系染付皿より、18世紀後半以降と考える。

161は平基式石鑿である。両側の押圧剥離は粗く、形態もやや不整形であり、未成品の可能性が高い。163は凹基式石鑿で、大きく半折する。また、図左面に一部擦痕を認め、打斧等の転用の可能性が考えられる。164は、I区砂層出土の楔形石器である。上・下縁に敲打による潰れが認められる。また、図右面には磨滅痕を認め、石臼等の転用の可能性がある。165は、I区上層より出土した細粒砂岩製の砥石。図左面を砥面として主に使用しているほか、図右面には幅0.7cm程の溝に使用痕が残される。

166は、建築部材とみられる加工木である。表面は炭化して木目が浮き出しており、加工痕は不明である。長さ71.7cm以上、幅9.9cm、厚さ2.7cmのスギの板目材を使用し、下端は欠損する。上端より約9cm下方に幅5.2～5.4cm、長さ3.1～3.7cmの矩形の穿孔を、芯々間で約33cm離れて2孔穿つ。さらに幅1.9cm、長さ3.8cmの不整楕円形の孔を認めるが、これは人為的に穿孔されたものかは不明である。167は、径8cm程度のアスナロの丸太材を利用した木杭である。表面は腐食が顕著で加工痕は不明瞭ながら、下端を多角形状に削り尖らせる。



第30図 SR01 出土遺物実測図3



第31図 包含層等出土遺物実測図

## 遺構外出土の遺物（第31図）

以下では、遺構検出時もしくは側溝等掘り下げ時に出土するなどして、帰属遺構が不詳な遺物について報告する。169は土師器蓋として図示したが、別の器形となる可能性もある。頂部に径3cm程度の円柱状の摘みを付す。170・171は脚台付の土師器皿もしくは杯である。172～173は土師質土器皿、177は同碗である。178は黒色土器碗で、内面には放射状のミガキが施される。これらの資料は、I区遺構検出時に出土したものが多く、SR02上層を中心とする資料と考えられる。179は、凸面に縄目タタキを施す布目平瓦の小片で、古代の資料である。181は、前節で既述したように、SR02のベースとなる縄文時代の流路より出土した可能性のあるスクレイパーで、直線状の刃部を有し、背部に自然面を残す。

## 補註

- 動物遺体の同定には、広島大学総合博物館 石丸恵理子氏のご教示を得た。なお、II②区からは詳細な出土位置は不明ながら、ウシの上顎臼歯片1点が出土している。

## 第4章 自然科学的分析の成果

### 第1節 樹種同定

株式会社イビソク

#### 1. はじめに

古川中流域の沖積平野に立地する小僧遺跡から出土した木材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

#### 2. 試料と方法

試料は、自然流路 SR02 の下位流路 A および B から各 1 点、SR02 から 7 点、SR01 畔以西から 2 点、北側トレント西半から 1 点採取された、計 12 点の生の木材である。木取りが確認可能な試料については、切片採取前に木取りの確認を行った。樹種 06 は繩文時代、樹種 07、08 は弥生時代中期、樹種 01、03～05、09～11 は弥生時代後期～古墳時代前期、樹種 02・12 は近世の木材と考えられている。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

#### 3. 結果

同定の結果、針葉樹であるモミ属とマツ属複維管束亞属、スギ、サワラ、アスナロの 5 分類群と、広葉樹であるクスノキとコナラ属アカガシ亞属（以下、アカガシ亞属と呼ぶ）、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節と呼ぶ）、スルデの 4 分類群の、計 9 分類群がみられた（以下分析は、株式会社パレオ・ラボ 小林克也氏の協力を得た）。マツ属複維管束亞属とアカガシ亞属、クヌギ節は各 2 点であったが、それ以外の樹種はいずれも 1 点ずつであった。同定結果を第 2 表に、一覧を第 3 表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

##### (1) モミ属 *Abies* マツ科 図版 1 1a-1c (樹種 08)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 1～8 列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1 分野に 2～4 個みられる。また放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高地に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高地に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版1 3a-3c(樹種10), 4a-4c(樹種01)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(3) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 図版1 4a-4c(樹種12)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(4) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版1 5a-5c(樹種03)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1~6細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1分野に2個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(5) アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図版1, 2 6a-6c(樹種02)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2~13列となる。分野壁孔は小型のヒノキースギ型で、1分野に2~4個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また精油分が多く、耐朽性に優れている。

(6) クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl クスノキ科 図版2 7a-7c(樹種06)

中型の道管が単独ないし2~3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は单穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1分野に2個みられる。また、放射組織や木部纖維には油細胞がみられる。

クスノキは暖帯から亜熱帯へかけての本州中南部、四国、九州に分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや軽軟なものから中庸なものまであり、切削加工は容易である。また、耐朽性および耐虫性がきわめて高い。

(7) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版2 8a-8c(樹種04)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は单穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加

工は困難である。

(8) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版 2 9a-9c(樹種 09)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ~ 3 列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(9) スルデ *Rhus javanica* L. var. *chinensis* (Mill) T.Yamaz. ウルシ科 図版 2 10a-10c(樹種 07)

年輪の始めに大型の道管が 1 列並び、徐々に径を減じた道管が晩材部では多数複合して接線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周間状となる。道管は單穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は平伏、方形、直立細胞が混在する異性で、幅 1 ~ 4 列となる。

スルデは石狩平野以南の北海道、本州、四国、九州の陽性の二次林に多く分布する落葉小高木の広葉樹である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、耐朽性が高い。

#### 4. 考察

弥生時代中期の自然木は、モミ属とスルデであった。モミ属とスルデは、ともに遺跡周辺にも生育可能な樹種であり（伊東ほか, 2011）、遺跡周辺に生育していたと考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期の板材はサワラとクヌギ節、木杭はアカガシ亜属であった。サワラは木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い樹種で、アカガシ亜属とクヌギ節は堅硬な樹種である（伊東ほか, 2011）。一方、自然木はマツ属複維管束亜属とクスノキ、アカガシ亜属、クヌギ節であった。いずれも遺跡周辺にも生育可能な樹種であり（伊東ほか, 2011）、遺跡周辺に生育していたと考えられる。

近世の建築部材とみられる材はスギ、木杭はアスナロであった。スギとアスナロは、真っ直ぐで加工性が良い樹種である（伊東ほか, 2011）。

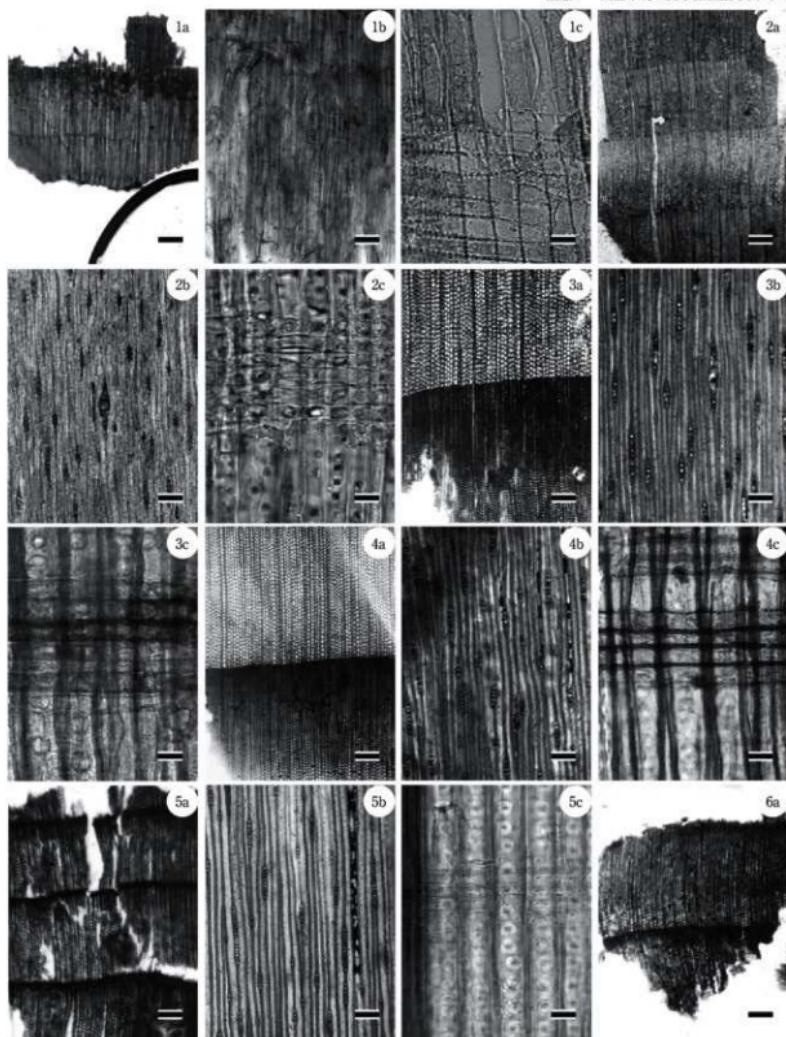
#### 引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 (2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社.

試料番号	管理番号	遺物番号	地区	遺構	層位	留椎等	樹種	木取り	遺定時期	年代測定期号
標種 01	IKK-Z-00236	不規則	1 - 14K	S8002	上層	自然木	ツブ星椎連竹束亜属	小明	弥生後期～古墳前期	
標種 02	IKK-Z-00224	167	1 - 14K	S801 明石西	下層	木杭	アスナロ	芯持丸木	古墳	
標種 03	IKK-Z-00227	28	1 - 14K	S8002	中層 3	板材	サワラ	油紙目	弥生後期～古墳前期	
標種 04	IKK-Z-00233	79	1 - 14K	S8002	中層 3	木杭	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	弥生後期～古墳前期	
標種 05	IKK-Z-00358	不規則	II - 21K	S8002 木柵	自然木	コナラ属アカガシ亜属	小明	弥生後期～古墳前期		
標種 06	IKK-Z-00354	不規則	1 - 14K	北側 1-14K	自然木	クスノキ	小明	調査年代	PFLD-3446	
標種 07	IKK-Z-00229	不規則	II - 21K	A38002 1 号道路 A	11 層	自然木	スズメノ	小明	弥生中期	PFLD-3446
標種 08	IKK-Z-00230	不規則	II - 21K	C28002 7 号道路 B	11 层	自然木	スズメノ	小明	弥生中期	
標種 09	IKK-Z-00225	不規則	II - 21K	A38002	道筋	自然木	コナラ属クヌギ節	小明	弥生後期～古墳前期	
標種 10	IKK-Z-00226	不規則	1 - 14K	S8002	上層	自然木	ツブ星椎連竹束亜属	小明	弥生後期～古墳前期	
標種 11	IKK-Z-00228	77	1 - 14K	S8002	下層	板材	コナラ属クヌギ節	油紙目	弥生後期～古墳前期	
標種 12	IKK-Z-00224	166	1 - 14K	S801 明石西	下層	建屋部材?	スギ	油紙目	古墳	

第3表 出土木製品の樹種同定結果一覧

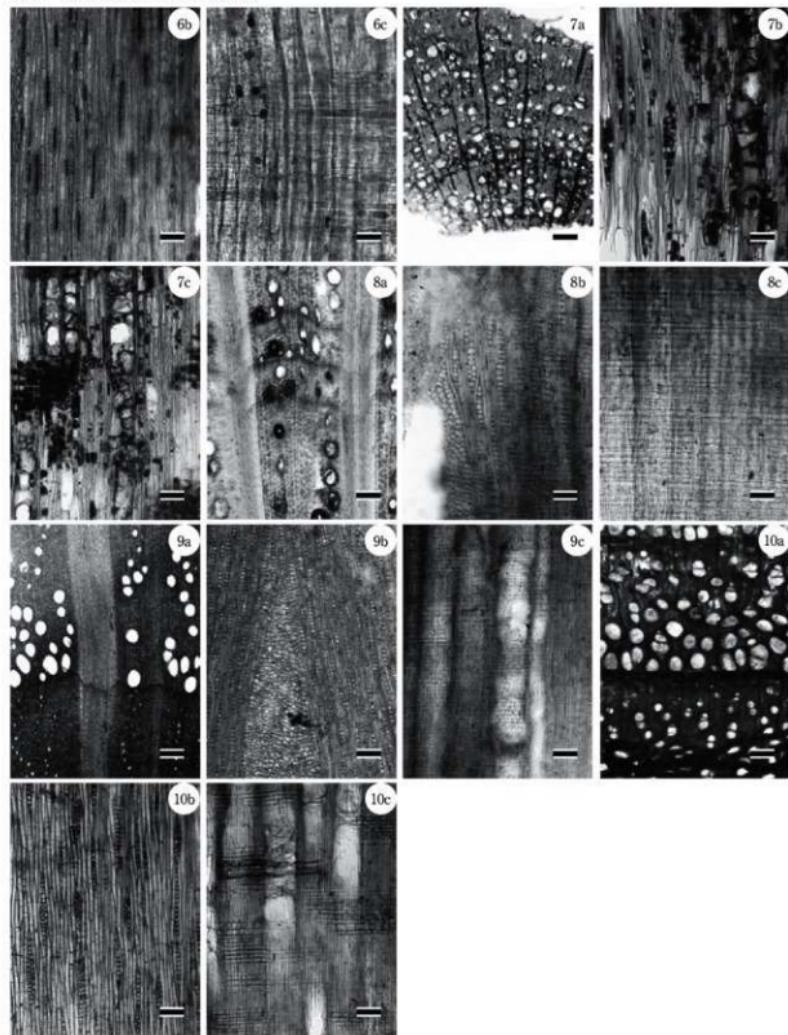
図版1 出土木材の光学顕微鏡写真(1)



1a-1c. モミ属(樹種 08)、2a-2c. マツ属複維管束亜属(樹種 10)、3a-3c. マツ属複維管束亜属(樹種 01)、4a-4c. スギ(樹種 12)、5a-5c. サワラ(樹種 03)、6a. アスナロ(樹種 02)

a: 横断面(スケール=250 μm)、b: 接線断面(スケール=100 μm)、c: 放射断面(スケール=25 μm)

図版2 出土木材の光学顕微鏡写真（2）



6b-6c. アスナロ(樹種02)、7a-7c. クスノキ(樹種06)、8a-8c. コナラ属アカガシ亞属(樹種04)、9a-9c. コナラ属クスギ節(樹種09)、10a-10c. ヌルデ(樹種07)

a: 横断面(スケール=250 μm), b: 接線断面(スケール=100 μm), c: 放射断面(スケール=625 μm・7-10:100 μm)

## 第2節 放射性炭素年代測定

株式会社 イビソク

### 1.はじめに

香川県東かがわ市の小僧遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料について樹種同定が行われている（樹種同定の項参照）。

### 2.試料と方法

試料はⅡ-②区SR02から出土した生材（試料No. 年代04: PLD-34665）、Ⅰ-②区北側トレンチ西半から出土した生材（試料No. 年代05: PLD-34666）である。試料No. 年代04, 05の生材は最終形成年輪が残っており、発掘調査所見では04は弥生時代後期～古墳時代前期頃、05は縄文時代と考えられている。測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである（以下分析は、株式会社パレオ・ラボ 伊藤茂氏・佐藤正教氏・廣田正史氏・山形秀樹氏・小林絢一氏・Zaur Lomtadidze氏・小林克也氏の協力を得た）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

測定番号	測定データ	試料データ	前処理
PLD-34665	試料No. 年代04 遺跡名: 小僧遺跡 管理番号: KICZ-0055 測定区: Ⅱ-②区 分野: SHG 切片: 生材	種類: 生材 部位: 自然木 試料の性状: 最終形成年輪 状態: wet	組合洗浄 有機物削除剤: アセトン 酸: リンクリー酸洗浄 (塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 鹽酸: 12N)
PLD-34666	試料No. 年代05 遺跡名: 小僧遺跡 管理番号: KICZ-0054 測定区: Ⅰ-②区 分野: 北側トレンチ西半	種類: 生材 部位: 自然木 試料の性状: 最終形成年輪 状態: wet	組合洗浄 有機物削除剤: アセトン 酸: リンクリー酸洗浄 (塩酸: 12N, 水酸化ナトリウム: 10N, 鹽酸: 12N)

第4表 測定試料および処理

### 3.結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、暦年較正結果を、第32図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うため記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

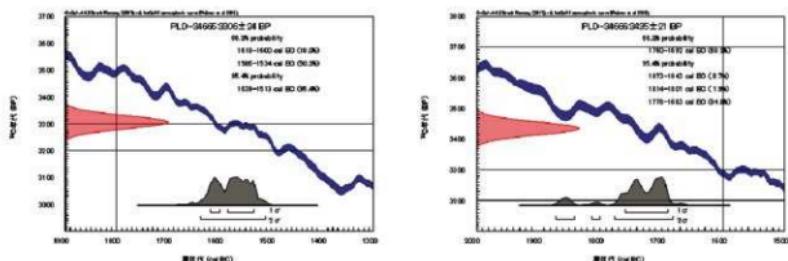
暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730

$\pm 40$  年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ:IntCal13) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に  $2\sigma$  暦年年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 曆年年代範囲	$2\sigma$ 曆年年代範囲
PLD-34665 試料 No. 年代 04 小僧跡	-27.23 $\pm$ 0.28	3306 $\pm$ 24	3305 $\pm$ 25	1619-1000 cal BC (38.0%) 1386-1534 cal BC (60.2%)	1639-1513 cal BC (95.4%)
PLD-34666 試料 No. 年代 05 小僧跡	-26.37 $\pm$ 0.19	3435 $\pm$ 21	3435 $\pm$ 20	1780-1692 cal BC (68.2%)	1823-1843 cal BC (8.7%) 1814-1801 cal BC (1.9%) 1778-1683 cal BC (84.8%)

第 5 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果



第 32 図 暦年較正結果

#### 4. 考察

以下、 $2\sigma$  暦年年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。なお、土器形式と暦年代の対応関係については、小林（2008）、工藤（2012）、岡田（2008）を参照した。

II -②区 SR02 から出土した試料 No. 年代 04 (PLD-34665) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $3.305 \pm 25$  14C BP、 $2\sigma$  暦年年代範囲が 1,639-1,513 cal BC (95.4%) であった。また I -②区北側トレンチ西半から出土した試料 No. 年代 05 (PLD-34666) は、 $^{14}\text{C}$  年代が  $3.435 \pm 20$  14C BP、 $2\sigma$  暦年年代範囲が 1,873-1,843 cal BC (8.7%)、1,814-1,801 cal BC (1.9%)、1,778-1,683 cal BC (84.8%) であった。これらは、縄文時代後期後半に相当する。試料は生材で、最終形成年輪が残っていた。そのため、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。なお、発掘調査所見では、試料 No. 年代 04 は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられていたが、測定結果ではそれよりも古い値を示した。一方、試料 No. 年代 05 は縄文時代とされており、分析結果と整合的である。試料 No. 年代 04 は、遺構内に古い時代の自然木が再堆積した可能性がある。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代。小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさし」: 257-269。同成社。
- 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—。373p. 神泉社。

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」：3-20。日本第四紀学会。
- 岡田憲一（2008）凹線文系土器（宮瀬式・元住吉山Ⅱ式土器）。小林達雄編「絶観縄文土器」：650-657、アム・ブロモーション。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

## 第5章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷

#### 縄文時代

第3遺構面のベースとなる灰色ないし黄色系粗砂・粘土層より、サヌカイト製のスクレイバー1点が出土した。そのほか調査記録には同層中より縄文土器の出土が記載されているが、遺物は残されていない。また、後述する弥生時代の自然河川SR02より、縄文時代後期の土器片が混入資料として出土している。これらの調査成果より同層は、当該期に流下した旧古川の自然河川の堆積層であった可能性が考えられる。河川堆積層は、調査区ほぼ全面に及んでおり、比較的大きな河川であったとみられる。本河川堆積層とSR02より出土した自然木各1点について、放射性炭素年代測定を実施した。分析結果は前章に既述したように、いずれも縄文時代後期後半の年代が提示され、理化学的な分析からも、自然河川が当該期に流下していたことが傍証された。なお、SR02出土試料は、縄文時代流路からの混入と考えられる。

当該期の自然河川は、近接する原間遺跡SRB07（香川県教育委員会2005）や、仲戸遺跡SR01・02（香川県教育委員会2016）等で確認されている。周辺地域で、残念ながら建物等の遺構は現在までに確認されていないが、これら遺跡の近接地に集落が営まれていた可能性は高いと考えられる。

#### 弥生時代～古墳時代

当該期の遺構は、第3遺構面で検出したSR02がある。調査地周辺は、本期に至っても自然河川の流域として、諸開発行為からは取り残されていたようだ。出土遺物は、弥生時代前期後葉、同中期後葉、古墳時代前期前葉、同後期の資料が出土しており、とくに弥生時代前期後葉と古墳時代前期前葉には、完形に近く復元可能な資料がまとめて出土しており、近接地に当該期の集落等が所在した可能性が想定される。また、後者の古墳時代前期前葉の資料は、遺跡東側の丘陵上に所在する全長約38mの前期前方後円墳である大日山古墳（1号墳）と時期的に近接する資料であり、同古墳の築造集団の所在を考察する上で、重要な資料となるものと考えられる。

なお、SR02より出土した板材等の加工木3点と自然木6点について、樹種同定分析を実施した。分析数が限られるため断定は困難だが、一部に針葉樹の二次林が広がることが予想されるものの、広葉樹も一定数出土しており、多様な植生の森林が生育していた可能性が考えられる。今回は、花粉分析等が実施できなかったが、今後の調査で分析がなされれば、より詳細な森林植生や開発についての資料が得られるものと考える。

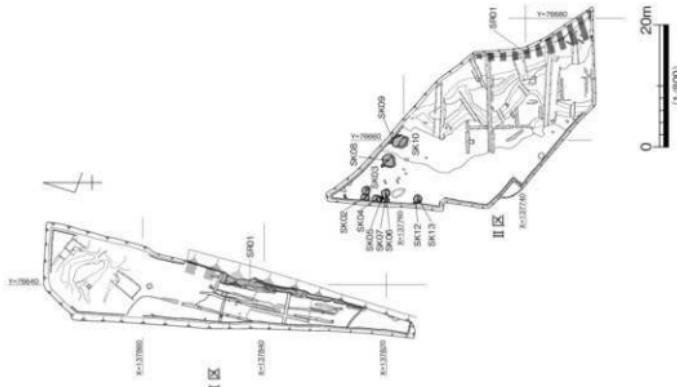
#### 古代

当該期の遺構は確認されていない。上述したSR02上層を中心に、少量の遺物が出土している。注目される遺物として、転用硯の可能性が考えられる須恵器杯がある。

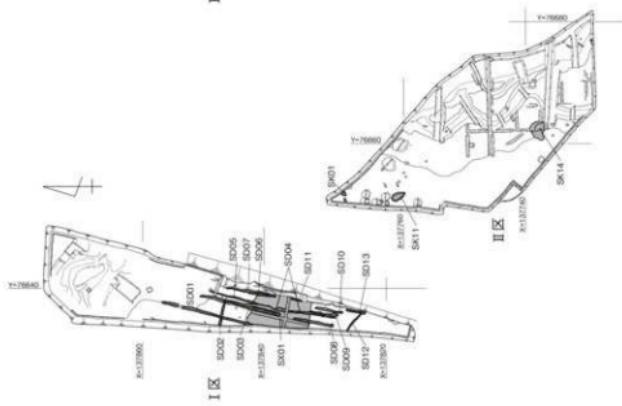
#### 中世

第3遺構面で検出したI区鋤溝群と、第2遺構面で検出したI区水田面と柱穴、II区土坑等が当該期

近世



中世



発生時代～古墳時代

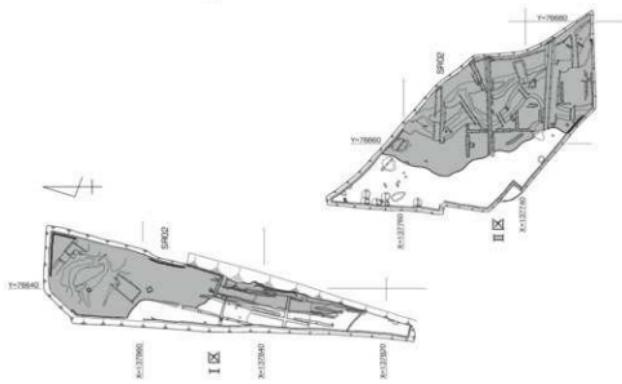


図33 遷構変遷図

小僧遺跡（香川県教育委員会 2018 年）

の遺構と位置付けられる。既述した自然河川 SR02 の上層より、11 世紀後半～13 世紀前半を下限とする遺物が出土しており、ほぼ当該期には自然河川の埋没が完了し、平準化されたと考えられる。

I 区鏃溝群から出土した遺物は、SR02 上層出土資料とは同時期であり、SR02 埋没後に調査区周辺が耕地化されたことを示している。柱穴や土坑は、出土遺物がほぼ皆無に近く、屋敷地等の居住域ではなく、こうした耕地に係る遺構と考えられる。鏃溝群の上位には水田面が開かれており、残念ながら水田耕土層等からの遺物が出土しておらず、時期を特定できないものの、13 世紀以降耕地として一定期間利用された可能性が考えられる。

### 近世

II 区第2 遺構面で検出した土坑群と、第1 遺構面の自然河川 SR01 及び旧耕土層群が当該期に位置付けられる。調査区周辺は、本期にも居住遺構は検出されず、依然として耕地として利用されたと考えられる。自然河川 SR01 は、古川の旧流路であり、その西岸付近を検出した。

### 報告書

香川県教育委員会 2005 『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原間遺跡』

香川県教育委員会 2016 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1編 仲戸遺跡・仲戸東遺跡』

第6表 土器觀察表 (1)

第7表 土器觀察表(2)

第8表 土器觀察表 (3)

第9表 土器觀察表(4)

遺物 遺傳 番号	部位	記種	品名	外觀		測量	剖面	色調	地底	石英	長石	鈣長石	鐵長石	斑紋	地上	地下	計測値(cm)	測定	備考
				外觀	外觀														
147	S301	上階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
148	S301	上階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
154	S301	下階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
155	S301	下階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
156	S301	下階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
157	S301	下階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
158	S301	下階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
159	東区古墳群 外土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
160	東区古墳群 外土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
170	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
171	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
172	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
173	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
174	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
175	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
176	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
177	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端
178	東区古墳群 土塁	土塁	土塁	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少	1.8 未端

第10表 土器觀察表(5)

遺物番号	遺物名	部位	記種	測量	地底	石英	長石	鈣長石	鐵長石	斑紋	地上	地下	計測値(cm)	測定	備考			
41	S302	上階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少
65	S302	上階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少

第11表 土器觀察表

遺物番号	遺物名	部位	記種	測量	地底	石英	長石	鈣長石	鐵長石	斑紋	地上	地下	計測値(cm)	測定	備考			
129	S303	中階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少
130	S303	中階世界層 土質	土質	褐色	褐色	1537.2±0.6	1078.2±0.6	褐色	褐色	少	少	少	少	少	少	少	少	少

第12表 瓦觀察表

遺物 番号	遺構番号	層位	器種	計測値 (cm・g)				石材	残存	備考
				現存長	最大幅	最大厚	重量			
68	S802	上層	石錐	1.83	1.40	0.27	0.68	サメカット	安存	四角式
70	S803	上層	石錐	2.36	1.97	0.35	1.52	サメカット	一部折損	四角式
71	S803	上層	石錐	2.52	1.77	0.30	1.17	サメカット	一部折損	四角式
72	S802	上層	石錐	3.03	1.23	0.61	2.03	サメカット	安存	未成品?
73	S802	下層	スクリュード	3.76	2.22	0.83	28.79	サメカット	付合完	
74	S802	下層	スクリュード	4.04	3.00	1.26	35.45	サメカット	付合完	
75	S802	上層	スクリュード	7.29	9.54	1.69	127.13	サメカット	安存	
76	S802	中層至 上層	鉛石	8.07	8.81	2.43	307.2	小粒砂留	安存	
100	S802	「上層」(複数?)	石錐	6.01	1.70	0.75	5.73	サメカット	安存	凸丸式。表面微に熱焼痕。
101	S802	「上層」(複数?)	石錐	2.04	1.39	0.21	0.82	サメカット	安存	平丸式
102	S802	下層(底部)	G錐	1.99	1.23	0.26	0.43	サメカット	一部折損	四角式
143	S808	上層	石錐	1.69	1.38	0.16	0.43	サメカット	下層折損	
144	S817	上層	G錐	2.21	1.6	0.25	1.02	サメカット	付合完	四角式
149	S809	上層	石錐	1.48	1.41	0.27	0.50	サメカット	一部折損	平丸式
150	S809	上層	石錐	1.77	1.26	0.28	0.70	サメカット	安存	平丸式
151	S809	上層	石錐	2.19	1.35	0.32	1.07	サメカット	下層折損	
160	S801	49層	石錐	1.86	1.33	0.45	0.95	サメカット	一部折損	四角式
161	S801	49層	石錐	2.77	1.84	0.32	1.64	サメカット	安存	平丸式
162	S801	下層	石錐	3.29	1.71	0.36	1.77	サメカット	安存	凸丸式
163	S801	下層	石錐	1.25	2.21	0.29	0.74	サメカット	半崩	凸丸式。一部分剥離。
164	S801	49層	楔形G錐	4.40	4.15	0.78	15.49	サメカット		
165	S801	上層	鉛石	12.8	8.1	8.1	1028.45	細粒砂留	安存	丸頭鋸歯
180	II区付合櫛等	石錐		2.0	1.4	0.25	0.67	サメカット	一部折損	四角式
181	II区付合櫛等(バース層)	スクリュード		4.47	10.56	1.01	40.62	サメカット	安存	

第13表 石器観察表

遺物番号	遺構番号	層位	器種	計測値 (cm)			形状	木取り	残存	備考
				現存長	現存幅	最大厚				
27	S802	下層	鉛錐	36.8	6.7	2.6	ヨコラムタケ錐	和田	上丁字形折損	椎貞御器
29	S802	中層至 上層	鉛錐	26.1	5.1	1.9	ヨコラムタケ錐	和田	上丁字形折損	椎貞御器
79	S802	中層至 上層	木錐	17.0	8.3	2.2	ヨコラムタケ錐	和田丸	上丁字形折損	
166	S801	下層	複合錐材?	73.7	9.9	2.7	ヨコラムタケ錐	和田	上丁字形折損	椎貞御器
182	S801	下層	木錐	45.2	7.6	6.6	ヨコ小口	和田丸	上丁字形折損	椎貞御器

第14表 木製品観察表

遺物番号	遺構番号	層位	器種	計測値 (cm・g)				材質	残存	備考
				現存長	最大幅	最大厚	内深			
152	S806	不明部位		13.72	6.31	0.25		鉄	破片	
153	S806	胸囲		2.28	2.26	0.09	0.04	2.05	鋼	[貴重品]

第15表 金属器観察表

# 写 真 図 版

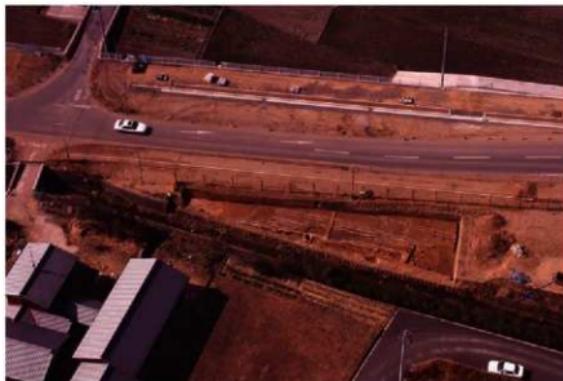
図版3 遠景写真1



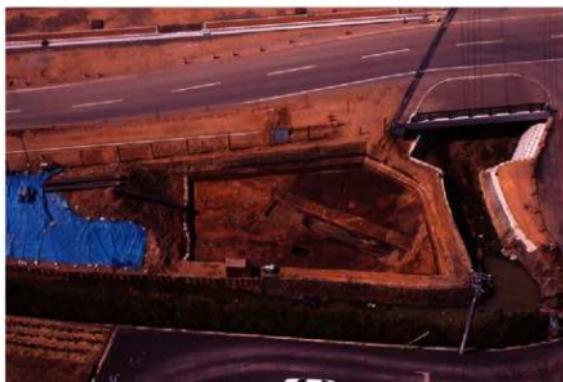
遺跡遠景（南より）



遺跡遠景（南より）



I - ②区全景（東より）



I - ①区全景（東より）



I - ①区 SR02 東壁土層断面（西より）

図版5 潛構写真3



I - ①区 SR02 検出状況  
(北より)



I - ①区 SR02 東半部全景  
(東より)



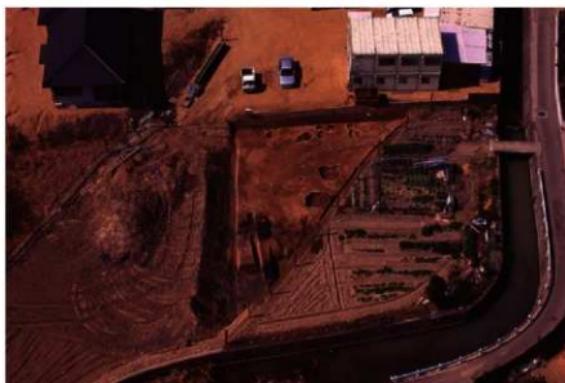
I - ①区 SR02 西半部全景  
(西より)



I - ①区 SR02 北半下層  
遺物出土状況（西より）



I - ②区全景（北より）



II - ①区全景（東より）

図版7 構造写真5



II - ②区全景（北より）



II - ①区全景（西より）



II - ②区全景（北より）



II - ①区北壁土層断面  
(南西より)



II - ①区 SR02 下層流路  
A 土層断面 (南より)



II - ①区 SR02 下層流路  
B 土層断面 (南より)

図版9 潛構写真7



II - ①区 SR02 下層流路  
B 遺物出土状況  
(南より)



II - ②区 SR02 下層流路  
全景 (北より)



II - ②区 SR02 下層流路  
全景 (西より)



II - ②区 SR02 下層流路  
A 全景 (北より)



II - ②区 SR02 下層流路  
全景 (北より)



II区より I区遠望  
(南より)

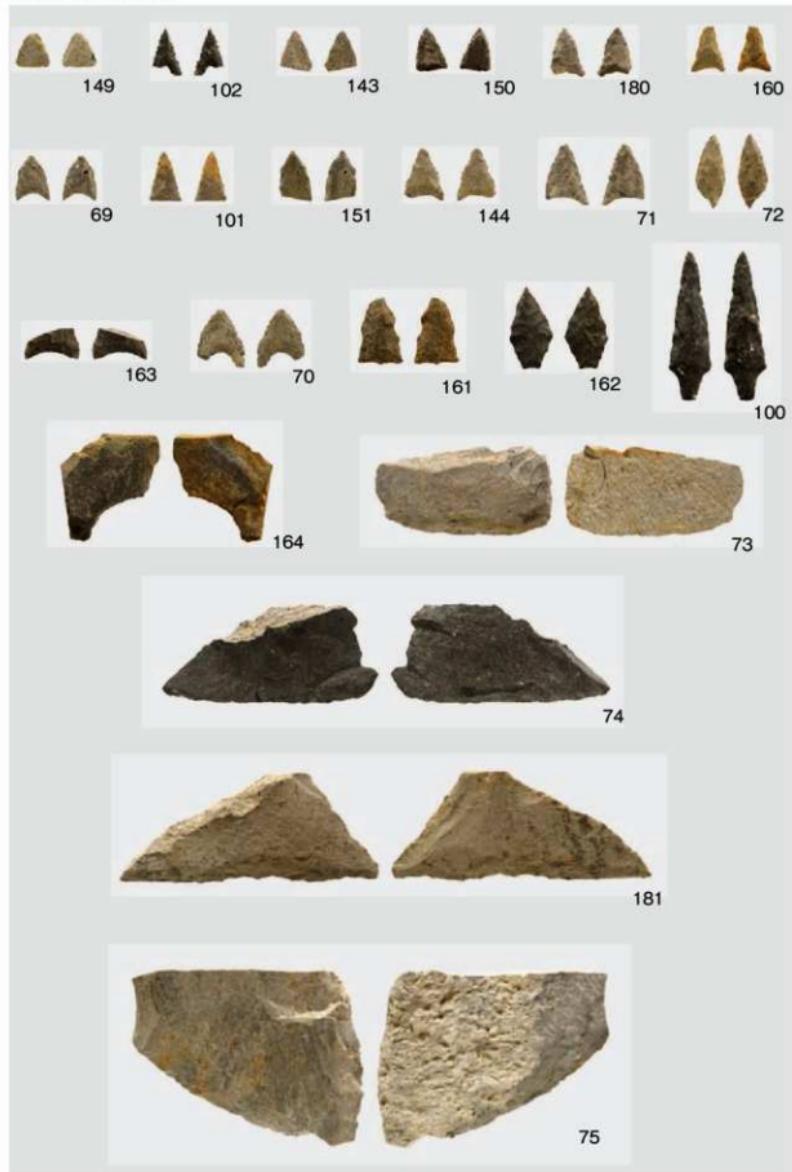
図版 11 遺物写真 1 (土器)



図版 12 遺物写真2 (土器)



図版 13 遺物写真3（石器）





76



165



152



153

図版 15 遺物写真5（木製品）



166



78



79



77



167

## 報告書抄録

ふりがな	こぞういせき							
書名	小僧遺跡							
副書名	中小規模河川古川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
編著者名	藏本晋司（編）、株式会社イビソク							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 In. 0877-48-2191 Mail. maibun@pref.kagawa.lg.jp							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	2018年3月7日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町	遺跡番号					
こぞういせき 小僧遺跡	香川県東かがわ市川東	37207		34° 14' 21"	134° 19' 54"	2000年1月1日～ 2000年3月31日	1,611m <sup>2</sup>	河川改修
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
小僧遺跡	集落跡 生産	縄文時代	自然河川	1	縄文土器、石器			
		弥生時代 古墳時代 古代	自然河川	1	弥生土器、土師器、須恵器、転用鏡、土製品、石器、木製品			
		中世	柱穴 土坑 鶴溝群 性格不明	16 3 1 1	土師質土器、黒色土器			
		近世	土坑 水田 自然河川	11 1 1	土師質土器、瓦、錢貨、木製品			
		要約		遺跡は、与田川と古川により形成された沖積平野南東部の平地上に位置する。東に隣接する丘陵上には、全長約38mの前期前方後円墳の大日山古墳が所在する。検出された遺構には、縄文時代後期から古墳時代にかけて流下した、旧古川の自然河川がある。自然河川からは古墳時代前期前葉のまとまった土器が出土し、大日山古墳築造集團との関係が注目される。また、自然河川は中世前葉には埋没し、以後調査地周辺は耕作地として利用されたことが明らかとなった。				

中小規模河川古川改修事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

小僧遺跡

2018年3月7日

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4

Tel 0877-48-2191

E-Mail [maibun@pref.kagawa.lg.jp](mailto:maibun@pref.kagawa.lg.jp)

発行 香川県教育委員会

印刷 ワールド印刷株式会社

付図 小僧遺跡平面図

